# 川柳塔

昭和四十年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十年十一月二十五日　印刷
昭和四十一年十二月一日発行（毎月一日発行）
（第一五号）

No. 15

十二月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一三〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館
うおまたろ
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3564

## 今月のことば

日に疎くなってはならぬ日を重ね

ふりむかぬ気の歯ぎしりが酌きこぼれ

秋の陽ざし落ち葉にあった裏おもて

小ざかしい嘘生むだけの眼であわれ

嘘嘘がこまこうゆれる披露宴

鼻の穴ひろげたままで歳が暮れ

◎結婚シーズンというので、しばしば披露宴に呼ばれる。豪華なおもてなしと同時に来賓のお言葉が近来少しずつ変っているのに気付く。殊に悪友ご代表ともなると、あることないこと面白うおかしうに一座を湧かすように努め、時によると新郎新婦が引っこみつかぬような事にふれることさえある。

◎民俗学者の塚崎進氏は笑いをおこす原因を五つほどにわけているが、悪友どもはその一つの「悪態をつくことによって笑わせる」という項に属するつもりらしい。しかし、悪友代表共が全然ユーモアというものを身につける事を怠っておきながら「笑い」の誇張を憶面もなくひけらかすのは自分自身の知恵のなさを披露するようなものである。

◎表現があまりの美事さに感心し、腹を立てるのも忘れて笑ってしまう誇張の「嘘」がある。笑いの種となる「嘘」であり、そしてそれは所詮「嘘」の技術ということになる。

落日へ大きく釣の糸を投げ　　路郎

中島生々庵

川柳塔十二月号

# 川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青


今月のことばと句帖……中島生々庵……(1)

師走ア・ラ・カルト……(20)

—同人特集　長野文庫・直原七面山・山川阿茶・河井庸佑・川岡霊眼子

川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)

紫の椅子を羨む……東野大八……(26)

大和路・浪速・京の旅……阿部佐保蘭……(40)

上杉謙信……(川柳戦国志・六)……富士野鞍馬……(28)

川傍柳初篇研究……(四十二)……(18)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

みちくさ……山上千太郎……(31)

川柳の使命……吉田水車……(40)

秀句鑑賞……(前月号から)……後藤梅志……(24)

川柳の墓碑……清水白柳……(47)
痴盲録……高鷲亜鈍……(29)
いのちある句……戸田古方……(30)
選者の使命……直原七面山……(44)
川柳医家忍者屋敷へ行く……不二田一三夫……(42)
野球と川柳……谷沢好祐……(45)
雅号ぶっちゃけばなし……臼井三林坊……(27)
近作柳樽……川村好郎選……(32)
大萬川柳「片思い」入選発表……清水白柳選……(52)
きのうきょう……本多柳志……(42)
こちら報道部……(46)
初歩教室……菊沢小松園……(50)
★柳界展望……(薫風)……(54)
★本社十一月句会……(庸佑)……(56)
★各地柳壇……(文秋)……(59)
「錠前」……丸川初甫選……(48)
一路集「グッドバイ」……野田素身郎選……(48)
「忘れる」……中村九呂平選……(49)
★編集後記……白柳・一三夫……(64)

# 川柳塔

## 中島生々庵選

人生も五十を過ぎて変化球
どこにでもいるゴキブリのような奴
ベトナムにいつまでかなし千日手
草々もおちぶれてゆく秋の風
秋空の涙しようじよう村貧し
うらめしくかなしく青い稲を撫で

青森市　工藤甲吉

趣味のない男のひとり言を聞き
万病の元だと風邪にあわてたり
食欲の秋へ汲取車が走り
まだ色気あるか散髪屋へでかけ
来年のことしか言わぬ五十代
ベトナムはどうであろうと稲を刈り

岡山県　浜田久米雄

急がない人生もある渡し船
（能面）をとつた顔に余韻のまだ残り
秋の水澄みきり目高藻にかくれ
マンションの塀に朝顔へばりつき
明治回顧（長崎市郊外）
虫の音にカヤにかこまれ去来の碑

大阪市　後藤梅志

ひとさまのためサンパツさせられる
水銀灯にはさまれていたお月さま
逆縁のちち肩で泣き声で泣き
白砂の雪に窪みを教えられ
アルバムの大佐は髭を立てていた

豊中市　戸田古方

大阪市　正本水客

類焼に遇いて

非常線　警官の措止若し
天井垂れ落ち仏壇の前に靴で佇つ
焼跡の暗さは虫の鳴く広さ
火元惨　花と香華があるばかり
焼け残つた物干の白さに雨が滲みる

下関市　国弘半休

転業の三態

草刈れば歌女(みみず)蛙の目に射られ
匍うて来る蛇には弱い蛙の目
巣を狙う長蛇鳶にさらわれる
逃げられるもんかと蜘蛛が搦めに来
忍ばせて持てば小石も兇器めき

大阪市　石倉旅風

書道

王義之は佇たせ良寛黙らせる
道と名がつけばへの字もままならず

盆踊り

レコードに代えて一杯飲みに降り
きりぎりす間を心得て鳴き交し
風鈴を団扇で鳴らしてみる暑さ

豊中市　寺田花宵

また訊いて覚えた花の名また忘れ
遅咲きの朝顔よけて草をとり
もう鳴らぬ気の風鈴に秋の風
朝からの雨はしみじみ秋の音
改札が行き先当てる顔馴染み

高槻市　傍島静馬

原価メモ得意先から届けられ
爪に火を点して蓄めて果てました
世話好きのおやじうちでは手がかかり
不仲でも柿は垣根を越えてくる
きよもまたうどん五分で昼がすみ

美禰市　安平次弘道

親切にマージャン教えてカモにする
わだかまりを残し白黒だけはつき
表札は亡夫のままに三回忌
豊年だ鎌をとぐ手さえはずみ
「君はまだ若い」と論戦負けている

大阪市　不二田一三夫

お百度を踏むエネルギーのムダづかい
落ち葉だと知ってか鯉は見向きせず
きみも早よ　起てよと易者に云うて去（い）に
食うか食われるか　きようも生きている

故郷おもう雨の飯場のトタン屋根

岡山県　直原七面山

路郎忌によせて

雲の峰を訪ねて路郎師と握手
あの頃は温かかつた恩師の手

自画像（一句）

七色の恋に七面山狂い
振り返える未練も持たで行く女

兵庫県　小西無鬼

自動車のドアは怒つた型で締め
夫唱婦随婦唱夫随で共白髪
思索の秋とかへ飲む事続くなり
山肌をこがね虫に似てブルドーザ

児島市　本田恵二朗

三度目の勝負ですつてんてんになり
ふところが寒いと妙に肩がこり
モナリザも遠く及ばす老母の笑み
釣書を楷書で書くも親ごころ

岡山市　服部十九平

子に下知をされてるように肩車
責任のないのが名案出してくれ
度を越したプレゼントから足がつき
呼鈴を押すに手ぶらの気がひける

高槻市　若柳潮花

削られてゆく山肌に残る萩
囲われた女のように鉢で咲き
手古舞の錫杖をすべる舞台の灯
茶音頭の帛紗かこいの色に濡れ

倉敷市　木村千容

ご老人さかなにされているみたい
こころにもなき敬老を口にする
旗たてただけで老人よろこばず

白衣のくちさか

天職のはずがとげとげものをいい

出雲市　尼　緑之助

カーボンで書いて五人の子へ便り
割烹着案山子迫真の背をまるめ
古典又よし夜のテレビに腹んばい
出雲時間ボス心得て着座する

岡山市　江国幽谷

何考えているのか祖父の日向ぼこ
ベレー帽でも被ろうかと見る鏡
欄干の下へ満月浮いており
アンケート僕の意見の項はなし

名古屋市　吉田水車

どこからか糸くずの出る針仕事
仏様今日も一日無事でした
定期券見せる手つきもそれぞれに
世の中がなくなるように十二月

岸和田市　内藤きさ子

栓ぬきは未だ見つからず湯もたぎり
共鳴の一歩手前の腕を組み
葬儀屋の嗚咽に馴れた目を伏せる
アベツクへ飯場はちようど昼休み

大阪市　山川阿茶

飲みたがる男着たがる女　秋
先き見えているのに実印刻り直し
カルダンの服を着たさに減食し
会者定離握手とバイバイ先ずおぼえ

下関市　桜川不水

鍬先に力がこもるいもの出来
よく成つたトマトねぎらい乍ら引く
むずかしくひねてひようたん面白い
秋風や無事消光罷り在り

島根県　藤井明朗

高原も紅葉となり湯治客
秋あわれ旅立つつばめ見送りて
あたたかくふる里の夜秋祭り
欠員は計算器がきてそれつきり

大阪市　橘高薫風

曼珠沙華妬心先立つ女に似
はつきりと長い寝言も秋の夜
兎の目ほどのしずかな恋ごころ

唖三味さんの三周忌

人情の秋深まればよみがえり

笠岡市　木山要次

中秋の名月（二句）

泣いて観た月とはちがうまん丸さ
名月に家族うどんを椽で食べ
内職の妻に気兼ねのお茶を入れ
魚屋の扱う紙幣の惨酷さ

宇部市　平田実男

ネツクレスイミテーションでいい若さ
機動隊荒れないデモが物足らず
相談欄迷いに解答者も迷い
筋書きの通りにサクラが買い初め

出雲市　中川晃男

亡母の煮し魚うまかりき魚食う

貼り出した忌中の紙へ秋の雨
豊年の実家に届く無心状
豊年の大夕焼に腰伸ばす

諫早市　川岡霊眼子

どん尻に生れた甲斐性親を飼い
手の届かん処もあつて背中掻く
嘘言うた口に馳走も押込んで
曲んでも見たし植木の松想う

鳥取県　清水一保

喰う金が有つて紅葉も美しい
粗品ではないから粗品喜ばれ
東北視察研修の旅より
感心をして聞く本場のズウズウ弁
会津盤梯山にて
もう一度来そうに手を振る左様なら

奈良市　宮口笛生

陽当りの広さに咲かす菊の庭
背伸びする姿でコスモス咲き乱れ
ねむいとは云わずに釣の朝があり
起きて待つ妻あり終電の一つ前

倉敷市　水粉千翁

世話になるおんな無口を派手に着る
もう戻る母を待つ子へ月昇る
恐れ入りました小声が重たすぎ
嘘であれかしと祈れば身が細り

枚方市　宮川珠笑

とび歩く子供追いつつ立ち話
入園料払い芝生で寝て帰り
叱る間が惜しいと書類つき返し
八ミリへ父がいちばんはしやいでる

神戸市　仲どんたく

河内の僧せやろせやろと法を説き
白鷺城にて
殿様になつて播州睥睨し
血の跡が無いかと腹切丸のぞき
東京出張
ビユフエの窓フジヤマを額に入れ

香川県　三井酔夢

天に浮くへちまのつるはたよりなし
蝶になる朝に毛虫の殺される
十字切る恋上すべり上すべり
飼い主のきまま甘えてたたかれる

大阪市　本多柳志

議員章やくざの足は洗われず

兄を送る
ゴールインのように兄貴が先へ逝き
香の煙喪主はカメラを意識せず
骨箱へ冷めたい秋の陽が沈み

ハワイ　羽佐間柳葉

クリスマスツリーは暖地も雪が降り
哀れさは見透されてるやせ我慢
古道具捨てるとなれば惜しい品
入智慧で買えば株の値また下り

岡山県　横山一声

職人の背広何事かと聞かれ
釣舟まで借つて三匹しか釣れず
青空へ勿体ない気で糸をたれ
気前よう注文しといて金呉れず

倉吉市　奥谷弘朗

口紅は娘のお古で足りる妻
期待する政治家像はよう書かず
小役人食つてチョンから抜けられず
出張にシロンを持たす妻がいる

岡山県　池田古心

金溜まる相で反逆児となり
くつろげる筈の祭に妻疲れ
へらず口親をからかう訳でなし
十分の一の差並んで釣つて知れ

笠岡市　出原真奇

豊年と云うからそうかなと想う
刈り終えた腰もやつぱり曲つとり
ガンであつたと墓地での立話し
二十年振りの珍友
再会の友から創学進められ

ハワイ　築山快夢起

社用族までともゆかぬ平の身は
日歩稼ぐケチな男が貯めて居り
簡単と前おき祝辞の長いこと
出来たあと仲人役を頼まれる

京都市　大鶴喜由

打ちあけるムードにするに月が出ず
多峰塔カメラを据えて雲を待つ
日の蔭の朝顔萎むのを忘れ

大阪市　大坂形水

レディファストの国を実地で見て帰り
例えれば人力車夫の立場とか
大正の頃が良かつた「横堀川」

門真市　福島鉄児

衝突の現場へ閑な人の群
救急車死んだ死なぬでもめている

パトカーも成績がある検挙率
岡山県　田村藤波

有為転変八十年か長からず
今日もまた誤字なく書いた人生史
名案は冷却期間と言う文字
大阪市　水谷竹荘

万歩計さげててタクシーに乗りたがり
行くあてのない週休の雨もよし
鳴いたかと鈴虫のつぼのぞかれる
大阪府　早川清生

うまいものたべなれうまいものがない
連休終わり新婚だけが旅にある
保守王国海へ漁村がしがみつく
大阪府　西いわを

親切がプライバシーの線を越し
百舌鳥啼いて吾が縄張りを確保する
虫好かん云うて一緒になつた人
岡山県　大森娯句楽

大学を出て戻らない貰わない
親しさがちよこにあふれる久しぶり
当つたらご免なさいとへらずぐち
大阪市　児島与呂志

血統書付けて小犬の値が上り
気を採ますことに興味を持つ女
風呂あがり湯気が目立つて秋を知り
大阪市　米虫一乃字

宴会へ上には上がある踊り
地下をみな空洞にして大阪市
なやみ事まぎらすためのクジを買い
大阪市　中島小石

花嫁のうつむきがちに何思う
女独り舞にいのちをかける意気
何事も気にせぬはずに胸さわぐ
泉大津市　高津徹也

大掃除陣頭指揮は父の役
親愛の情がお盆を省略し
如何せん大器に非ず親想い
岡山県　藤原秋月

出しやばりの新人にもう邪魔にされ
スクールバス荷物のように配られる
無灯火を満月の夜に咎められ
大阪市　今西章雅

自転車で行けばすぐだと出たつ切り
十五夜の月へ無粋なアーケード
御近所へからだで世話の出来る幸
奈良県　木村十悟

出稼ぎの娘が嫁はんで戻つて来
協力費とはうまいこと取りくさり
少年と云うにはでかい監別所

善通寺市　岡田拳法

ここへ来て座れとこわい父になり
そんな手もあるかと楽屋話聞く
圧力の順に話を聞く政治

岸和田市　植山武助

秋風と共に笑顔を取り戻し
とうちやんと呼ぶからかあちやんと呼んでみる
ビル街の虫は窮屈そうに鳴き

竹原市　山内静水

浴びるほど飲み割勘でもめており
逆転をされてダイヤル子にまかせ
勝ち逃をさせてはくれぬ破目となり

堺市　青山慶之助

ハミングで炊事をしている母若し
紹介状書いて医者はサジを投げ
わがままな姉とは見えぬつのかくし

玉島市　井上旭峯

黒幕があやつる紐の伸び縮み
点と線結んで刑事にある自信
五寸釘の抵抗抜けてやるものか

出雲市　原独仙

寝るとこは無くとも文化器具ずらり
結局は生きる手段の嫁にゆき
産んでから男であつたらなあと慾

大阪市　川口弘生

プレゼントする日がふえた敬老日
長生きのただそれだけの尊さよ
覚えてた記念日妻に感謝され

愛媛県　村上旭童

秋祭り明日はねる気の酒になり
やけ酒は遠巻きにしてみつめられ
失対の人夫にさえも上中下

玉野市　小谷仙山

成せば成るそんな言葉に踊らされ
労働の明日に備える大鼾
ちつぽけな幸せ飾る赤い羽根

大阪府　谷沢好祐

帰つても会社が続いている社宅
洗つても汚れの残る手が稼ぐ

運動会風景

ゆつくりと転がす樽は早く着き

倉敷市　野田素身郎

誰が誘うともなくくぐる縄のれん

根限り働き夜長を寝るばかり
月見酒月が二つに見えてくる

姫路市　隠岐不酔

身たしなみ白髪を染めて入歯して
君もかと辞令見せ合う左遷組
事もなし犬が両足伸ばしてる

京都市　松川杜的

修学院離宮拝観

紅がらが緑に溶けて寿月観
滝見灯籠少うし濡らし雨上る
御幸門マイクがあつて絵にならず

鳥取県　森田布堂

叱られる頃に姑の肩をもみ
あの人がこんなことした酒だった
電化してまだ湯たんぽを抱いて寝る

竹原市　杉原愛鳩

雀今日も豊作の田へ出かけ
セールスがねばれば妻がまだねばり
はじめての大阪親も子もすられ

大阪市　中川滋雀

天国へ叙勲の沙汰が供えられ
用も無い客に昼飯食いそびれ
日めくりへ今日は何日やと聞いている

伊丹市　小川静観堂

数度の出征いのちめでたく金婚日
牡丹見にお詣りしなおすことにきめ
たどり着いた女人高野の秋暑し

大阪市　福井野迷路

性懲りもなく首相は襟正し
ばたやさんあんたつまりは幸福や
敬老と言われ足腰のばしてみ

鳥取市　森本法泉子

妻の入院続く

病院の炊事場だけが活気づき
超然としていて盆暮に気をつかい
公債で収支つぐのう有難さ

熊本市　楠田英子

店先で献立かえる定価表
ビタミンC安いものからとるときめ

天草五橋

観光の波へ五橋が目を見はり

岡山県　浜野奇童

かあちゃんがこうまで叱るとは知らず
旅帰りなんにも言わず寝てしまい
いさかいの今愛情の置きどころ

小松市　関戸宗太郎

ベトコンの戦果言訳ほどに載せ
秋悲し雀にさえも見離され
人骨が出て思惑の地価下り

新居浜市　安藤桂仙

お流れへ座り直した身の卑屈
同情にすがり落目の気が弛み
人倫を説いて妻子にうとまれる

大阪市　西田柳宏子

つながれた生活へ犬の大あくび
雨だれの音まで手形せきたてる
マークされてからは実力出しきれず

宝塚市　小畠無聖

秋はもう熱い番茶の飲み心地
身ぎれいな癖が乱れ毛かきあげる
自動扉俺にも差別なく開らき

今治市　越智一水

腹の立つ日は大空へ話しかけ
南無仏わすれて旅の秋彼岸
説得が出来ぬかなしさ子を怒り

平田市　久家代仕男

入れ替る客へ座布団裏返し
洋風に建てても庭に松が欲し
刈り入れが済めば秋茄子までしなび

堺市　高崎雄声

娘結婚
結納もすみ娘俄かに他人めき
腕時計はずして解放された感

東京より帰りて

五日目の我家への道懐かしく

新居浜市　近藤凡生

生涯の起伏五線譜に書いて見る
死とはなにか五臓六腑の苦笑い
名月へ悔なき心見てもらい

大阪市　河井庸佑

天狗出た山アクセルを踏んで越す
どっちでもよい案なのに目じり立て
三つ四つ先をみこした話しぶり

高槻市　辻白溪子

秀才の理屈が現実からはずれ
砂時計砂が動いて音を持ち
言論の自由へ無学さらけ出し

芦屋市　丸川初甫

質問を浴びて眼鏡を拭くゆとり
離婚説離婚どころかのろけられ
孫の手にまだ青年の気でひかれ

熊本県　有働芳仙

おめでとう飲みたい顔に取り巻かれ
大学に入れて野良着の胸を張り
放出のダイヤに遠いくらし向き

大阪市　金井文秋

集金を待たせ電話の長いこと
食うてちよんと言うてて株を買うてはる
墓地を売るビラを読むのも齢かいな

加賀市　木村一路

映論の鋏商魂を切り捨てる
野球部へスカウトが来る三学期
ホームバー妻に酒量を見くびられ

大阪市　森本良夫

返事にはならぬ返事をして別れ
けつたいな人やなあと親しまれ

長男の結納

仲人の足しげくなり妻多忙

笠岡市　木山遠二

豊作へ台風がまたそれて行き
憎らしや雀　案山子を怖がらず
老の日日猫も家族の数に入れ

大阪市　宮尾あいき

滝近く山の冷気が身に浸みる
ひまわりの首うなだれて曇空

キユウリきざむ音に女の幸思う

松江市　柳楽鶴丸

強烈なパンチ忘れる勝名乗り
仏壇へ菊の大輪惜しみなく
イメージの野菊押花にして待つ挙式

大阪市　室谷鉄舟

木枯しへ牧神石のラツパ吹く
欲のない馬券大穴当てて去に
長靴を嘲るようないい天気

和歌山市　西尾義一

麻痺の児を背負う肩巾広くする
我が影が足の邪魔する千鳥足
家計簿をゆさぶりつづく領収書

和歌山市　二越俊爾

田舎から来て松茸を町で食い
城のある町を横切るゆりかもめ
鉄筋の家から百姓野良に出で

鳥取市　藤本礎山

知つて居て親馬鹿になる幸もあり
湯の宿で妻の肩もむ気にもなり
坪十万の雑草伸びるだけ伸びる

和歌山市　土谷城石

己が影叩いてあんま路地曲る

街の灯をもろて米磨ぐ艀妻
別口もちやんと含めた領収証
京都市　都倉求女

雨の大台ケ原
雨とガス大台ケ原我ひとり
原生林しげしげ鹿に見つめられ
米子市　石坂新雪

眼鏡のすべつた位置で子を叱り
気の抜けたビールを女まだ惜み
大阪市　神谷凡九郎

美辞麗句そろそろシビレ切れて来た
父ちやんも今の僕ならそう云うよ
加賀市　那谷光郎

特価品あさり禿鷹にも似たり
女傑その昔は男にこりました
呉市　林野甦光

初出勤の目に煙突は高いもの
自然の法則とか太陽が欠げる
兵庫県　河原みのる

あと追い心中きみがホントの勇者だよ
虫目がねも一ツ要つて字引きひく
布施市　本多清人

成人向映画へ成人眉しかめ
べんちやらも能力なりと知つた悔い
愛媛県　渡辺暁童

秋の空のはてるとこまで旅したし
面白い誤植をかこむデスク閑
大阪市　西出一栄

子守唄明治の唄でも眠る孫
倦怠期其の都度変るお茶の味
高槻市　山田季賛

ズバリ話せて先輩に賞められる
皆出かけた後で扇風機に当り
松江市　岡崎祥月

ゆつくりゆつくりゆつくりと踏むペタル
神仏というオアシスに生きる身の
青森県　木村涼人

いい人に食べられてくれりんごもぐ
運輸大臣辞任
荒船に浮世の波は甘くなし
福岡県　太田湖平

台風の逃げたる方へ娘の住い
辛抱はカラーテレビの値下げ待ち
大阪市　村山光輪

親子三代パパのハンドル頼りにし
金欠の日曜ステレオで助けられ

富田林市　岩田みよ

絶景の流れに筏身をまかせ
人の目のつかぬ所で泣きなおし

小松市　馬場魚山

ああでもないこうでもないと事故のあと
人の知恵月は笑っているような

芦屋市　松下たつみ

2DK家風を捨てたいい暮し
出る杭が打たれて静かな社にもどり

京都府　清水谷句楽坊

生きてゆく事におわれて空仏念
野狐禅でお茶をにごしてやっと生き

兵庫県　大江秋月

単身赴任妻が封じに来る浮気
いびきかく癖を知られた旅の宿

三次市　和泉松風

迷わずに成仏せよと枕経
七光り同僚の目がうるさくて

大阪市　天正千梢

ここは御国のうたつて解散明治組
味ほめてもおっさん調子に乗つて来ず

鳥取県　渡辺乱坊

秋の雲僕を高きに誘うなり
戯れに妻を背負うて月を賞め

児島市　伊丹阿喜良

ブロマイド派手に独身寮の壁
味気ない返事フアイトの腰を折り

大阪市　本庄金三

妻の留守さりとて市場籠も持てず
セールスマンご褒美旅行へ精をだし

富田林市　川端東雲楼

枯草に草の色してバツタいる
快適の秋へ持病の身の患え

大阪市　宮地双楽

夢のない余生は張りの無い姿
朝風呂で何時もの隠居のしぶいのど

守口市　羽原静歩

音吐朗々代読の味けなさ
腕くめば同志離せば只の人

加賀市　細呂木魯木

同年会女中は違つた年に見る
虫干しの思い出の柄へ手を通し

岸和田市　葛城伊三郎

あばたでも月は昔のままでよし
秋の気配足のさきから感じて来

泉佐野市　大工睦夫

敬老の日ものんびりとすねかじり
無理に割込んだがお尻はいりかね

★

内藤きさ子受賞を祝う

賞でられてなお下り咲く藤の花
妻よりも早く手形に起こされる
赤い羽根千人針をふと憶い
宿の膳つい片付ける妻の癖
松茸の誘惑十グラム三十円

川村好郎

五十肩やろかと自分のは思い
同情どころか腰痛を年にされ
背番号おぼえる頭馬鹿でなし
汚職吏をあばく大雨降りつづき
キウリ巻最後に食べて通という

北川春巣

母九十歳で死去

大往生ひきとる呼吸にあわてたり
手提袋持たす寝棺に又哭きぬ
孫曽孫四十三人かこむ柩は祭めき
焼香順読み上げる声秋高し
鯨幕の上に万朶の秋桜

西尾栞

若本多久志

北条の五百羅漢にて

中に一体意地悪るそうな石仏
堂々と遅刻して主賓悪るびれず
この歳でまだ老妻へかくしごと
おじいちゃんが好きと言わせる馬になり
老妻にないしよで孫にやる玩具

菊沢小松園

恥部さらけ出して都会の夜が更け
案ずれば切りがない世の判を押し
値札追う眼がきびしさを増して来る
働かぬ人のハンカチ真白し
声を出す恋もキリンのして見たく

松江梅里

カップルの秋解禁のひのえうま
一代で築く偉業を子は継がず
ゆるめたり締めたり愛の飼育法
順調じゃないとは二号だけが知り
もつれても解けるこころが結ばせる

清水白柳

言訳を面白く聞く茶がうまい
たつた一と言がほんとうの他人にし
焚口へうつぷん洩らす風呂の母

末娘結婚

芽出度さの蔭に目立ぬ金が消え

# 川傍柳初篇研究（四十二）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

440　**餓鬼が飯くふと吉野ハさびれ也　五扇**

高須＝「餓鬼が飯食う」は「施餓鬼」のこと。「吉野」とは吉野丸のこと。隅田川でならした吉野丸も、施餓鬼舟となってはもうおしまいだ。すなわち、さびれはてたものだという句で、ものの終末のあわれさを詠った句。

前田＝賛。「老い込むて後生を願ふ吉野丸」（一二・2）

岡崎＝吉野丸の終末というわけではない。川施餓鬼は七月朔日から三十日間行なわれたが、この間川、涼みや花火、雪見のときに使われた吉野丸・川一丸の遊覧船が一時借りられた。

清＝大型の屋形船（吉野丸・川一丸など）の使われる順序を季節で追ってみると、雪見・花見・納涼・施餓鬼となって、施餓鬼のあと雪見まではしばらくの間がある。したがって、施餓鬼が終ると当分は客もなくなるのでさびれることになる。「空に川出来ると吉野さびれなり」（傍初41）と七月七夕の句で同意のものもある。

川端＝清説賛。冬になると吉野も川一も屋根を取り去って、ただの荷舟に変った。「三味線と念仏あとは大根なり」（安）

丸＝諸説につく。

岡田＝同。但し、冬期は大根などを運ぶ荷舟に使ったから、雪見には使用されない。

441　**ちうとふにして四書杯を売払ひ　五鳥**

高須＝「ちうとふ」は中途のことで、道なかばの意。「四書など売り払う」のだからもう勉学がいやになったこと。四書五経より吉原の方が面白い。「素読など不可なりとして息子行き」（一三・37）

清＝賛。労咳にならないですむ。

藤井＝江戸の書生行状記。この男ついに二十にして迷う。

丸＝賛。

岡田＝同。但しこれは「論語」の「中道にして道を廃す賢と云うべきや」の文句を利用した句。だから上五は「中道にして」と読まねばならぬ。四書五経の漢籍を売り払うのだから「論語」のことばが俄然、文句取りとして生きてくるわけである。

442　**鶏の啼迄馬鹿なうたかるた　眠狐**

高須＝「鶏のなくまで」は夜の明けるまでの意で、徹夜して歌カルタを取っている若い連中を、同じ徹夜でもこっちは「メクリ札」（バクチ）をやっている悪い連中が「一文にもならないことを馬鹿な奴らだ」と嘲笑している句。現今なら「ポンチー」とカルタを笑う夜明け方」である。

清＝よくもまあ、あきないでという嘲笑。

藤井＝礎稿の通り、やはり「メクリ」が「歌カルタ」を嘲笑したと見ないと句が面

白くない。

**丸・岡田**＝賛。

443　**廿五にしてハ若ひと猟師いい　眠狐**

**高須**＝不明。二十五才は男の厄年で、川崎大師へ厄おとし詣りをした。「二十五と四十二でこむ渡し船」（二・21）「二十五と十九さといふ奴床」（七八・36）で、川崎在の漁師（当時は漁師と猟師とを混同して使っていた）が「あの男若く見えるが、あれでも二十五かな」と言ったという句と思う。

**前田**＝心中か何かの事故で死んだ二十五の男を見て、「二十五にしては若い」と猟師がいっている。死んでいた場所は猟師に縁のある山野であろう。

**清**＝普通道楽に猟を始めるのはかなりの年輩になってからのこと。その年輩の連中にまじって二十五才の青年がいる。二十五才といえば労咳で苦しんでいるか、吉原通いのどら息子でいるのが、ごくあたりまえなのに、この青年は猟を楽しんでいる。そこで年輩の猟師達が暑いのになかなか感心な男だわいと感心している。以上駄労解。

**藤井**＝これだけではどうしてもわからぬ

**川端**＝山中での行きだおれか？

**丸**＝残念ながら分らぬ。廿五才にして何かの事件をおこしたか、関係したか、それは猟師とのつながりをもつものである。当時そうしたことがあったか、過去（歴史的）にそうしたことがあったか、いろいろ考えてみたが思いつかない。

**岡田**＝難句の一つ。丸先生のいわれるように、これは故事を詠んだものと狙いをつけているが、残念ながらまだ正体がつかめず。後考。

444　**人見しりせず昼ミセへたれてくる　菅江**

**高須**＝前にもしばしば出た女郎の借子。もう馴れているので人見知りなどしない赤ン坊、昼見世の女郎の膝へジャアジャア「アレアレ、早く小母さんを呼んで来てくんなまし」

**藤井**＝賛。ケンランたる吉原の幕間の一シーン。人見しりしない子には、まだ綺麗なおばさんとしか考えていないんだろう。そしてそれを抱く女郎にも母性愛は秘めてある。

**丸・岡田**＝賛。

445　**御曹子名香をはき通ふなり　門柳**

**高須**＝伊達候の吉原通い。伽羅の下駄をはいて、三浦屋高尾に振られに通いつめた大名息子を詠んだ句。「十九文ほどもてない伽羅の下駄」（一五・13）「振られてもぬからぬ顔の伽羅の下駄」

**前田**＝「名香をはき」がうまい。

**岡崎**＝「名香をはき」は、伽羅の下駄しか思い当らないが、弱冠二十才から山谷通いをはじめた伊達綱宗候は仙台藩国守の当主である。御曹子は平家の公達に対する源家の子息の称で、義経なども御曹子だった。源義家が幼名を曹司子といったところに由来しているという—だからちょっとひっかかる。

**清**＝礎稿に賛。但し御曽子は御曹司の誤用ではなく、どちらも使われている。また岡崎氏の説による御曹子は狭義の曹曹子。曹司とは、宮人・女官等の用部屋の称で、それにより公卿の子息にも用いるようになった言葉。武家でも源家嫡流の子息の称に多く用いた。この言葉は織豊時代初期頃まで用いられた。

**藤井**＝「名香を吐く」と「名香の下駄を履く」とにかけただけ。

**丸**＝賛。「御曹子」はこの場合、岡崎説の如く当主であるから正しい使い方ではない。但し祖父政宗は従三位参議権中納言、父忠宗は今調べがつかないが、綱村は従四位左近衛少将であるから、ともかく公卿の列にはいっている。吉原通いには当主であるより、「御曹子」という方が似合わしいので、用法の正誤に関係なく、この語を用いたのであろう。

**岡田**＝しかし、この「御曹子」の使用しかたは拙。

# 古本屋の師走

長野文庫

大抵の人が年末になるといろいろ身辺に整理せねばならんことが起こって来るものである。例えば飲食代の借りとか商店からの借りとか世話になった人へのお歳暮とか趣味の会の会費とか、その他何とかかんとかで幾ばくの金を工面しなければ年の瀬が越せない、たんまり月給を頂き、何カ月分もボーナスを貰う結構なお方なら、これで十分賄えるが、ほとんどの人は皆それ相当にやりくりが必要となる。

私の店へ来られるお客様は何れも本をよく読む読書人だから人一倍賢こい方だのに、案外理財の道に疎い人が多く、金に縁の遠い人が少くない。それで年末のやりくりに本を売る人がたくさんあり毎年十二月には普通の月より買物が多い、元来好きで買っている本だから売りたくないのは山々だが、本でも処分するより他に金工面を知らないのだから止むを得ん次第である。

しかし本のみとは限らないが、何でも買って愛蔵しているものを売るのは身を切られるほど辛いもので、なるべく痛くないもの、つまり惜しくないものを先ず売るのが人情であろう。ところが持ち主がどうでもよいものは、買う方でもどうでもよいので大したお金にならない。だと言って金になるものは売るのが惜しい、まだ必要なものとか、再び手に入り難いものを金のために処分する気持は十分察せられる。

何年か前のことだが、年末押しせまって百科事典を売りに来た人がある。何か急に金が入用になったらしいが、さぞ惜しみがかかっていたに違いない。ところが百科事典はその後ぞくぞくよいものが出て来て値段は下る一方だから売った方もそう惜しくないだろうと思うし、本屋も気が楽だが、せっぱつまって必要の本を売ったところ、その後うなぎ上りに値段が上って買い直すのは馬鹿らしいし売値が安かっただけにいつまでも無念残念に思っている人もあるだろう。中には口に出して「あれをあの時売ったが惜しかった」と言う人もある。こんな場合古本屋もまことにお気毒に思う、十二月だったかどうか忘れたが十年以上前の冬のことだが、漢文大系を売った人があるが今のベラボーな高い値段を聞いてどう思うだろうか、私の方も残念に思っているのである。新本屋で十二月によく売れるのは日記だが、古本屋の方では来年用に暦（こよみ）がよく売れる。また忘年会用としてか流行歌の本とか福引の本とかが売れる。受験生は最後の追い込みに忙がしくて年末に特に売れるわけはないが、それでも問題集などはよく探しているようである。とにかく十二月は古本屋として余り忙がしい月でなく、わが身辺の方が忙がしい。

本までは金の廻らぬ十二月
一月号古本に出る十二月
忙がしさ他所にぼんやり古本屋

（古本商）

# 防犯の網

直原七面山

〝どちらへお勤めですか〟と聞かれると、〝警察のほうへ〟と答えることにしているが別に犯人を捕えたり、汚職事件を発いたり、交通事故を取締ったりする警察官ではなく、専ら後方にあって、縁の下の力持的役割を果たしている通信の職員である。

さて、師走ともなれば、他の職場と同じように、犯罪に関する情報交換や諸手配の電報が急増する。

日本人はどうしたことか、金銭上の問題以外、愛情の問題等についても、年末も押し迫って来ると、もろもろの案件を一挙に解決しすべてに決着をつけてゆかなければならないというふうな重大な使命感にとらわれるらしく、犯罪の様相も多種多様化するとともに、強悪化して来、自殺や心中事件の数もまた多くなってくる。

この職に就いて二十年、そしてまた川柳を始めて二十年。

さぞかし職に関する句も多かろうと自らも思い、句帳を丹念に繰ってみたが案に相違して句数が至って少ない。

しかもその句の中から師走の句と言うことになるとほんの数句にとどまる。

**防犯の網にかかった署長の子**
**十二月金のあるのへ惚れ直し**
**十二月そろそろ恋の始末もし**
**ボーナスは手応えもなく消えてゆき**
**北風の街をクニヤクニヤゲイボーイ**
**北風へ母が恋しい靴磨**

ご承知のごとく警察は、年末警戒として、日ごろは眼の届きかねる露路のすみずみにまで強力な防犯の網を張りめぐらす。

ところがある夜、捕えてみればわが子なりではないが、その網に、自署の署長の自慢の息子が引っかかった。

息子を捕えた警察官と、その警察官に指示を与える上司と、三人三様の立場と心の中を押し計って見ると、これがなかなか面白い。

が、私はこの句を作るには創って見たものの、この句を公に発表するに当っては、そのころはまだかなりの覚悟のいったことを付言しておきたい。

夜の世界に美しく息吹く女たちにとっても、師走の風は至って冷たく酷しい。

そこで、金の無くなったスポンサーから、金のあるスポンサーへ鞍替えするホステスも現われてくる。

水は低きに流れるの理にも似て。ところがときどきこれに殺人事件が搦まったりして、人間模様の奇怪さと、複雑さが目の前に浮きぼりされて戸まどうことさえもある。

かと思えば、毎日を数多くの恋人たちに取り囲まれて、幸福な日々を送り、そのままでいても良いはずなのに、わざわざ、師走を控えて恋の始末に取りかかるご仁もある。

新年とともに、もっともっと刺激的な新しい恋に生きようとする魂胆か、それともまた狩人の常のように、新しい恋の冒険に邁進しようとするのかは知らないが。

ともあれ、師走に集約される人間生活の中には、目をそむけしめるような暗い犯罪やニュースもある反面、吹き出すようなユーモラスな場面もあって、なかなか愉快で味い深いものがある。

# 女医寸感

山川阿茶

十二月はお商売によっては売り月で注文品に追いまくられるというご多忙でしょうが、私の方は医者、殊に専門が皮膚科ですから患者さんといっても働ける人ばかりで忙しくて通院出来ない人もあり、かえって常よりはヒマなんです。二十日すぎからは無理したり治療をサボって悪くなった人々か、やれクリスマスまでにとか、正月までに治してくれとか、まるで大工か左官にモノをたのむようなことを言って来ます。

また忘年会とかクリスマスパーティとか、とかく飲む機会が多いので脱線組の後始末をさせられます。知らぬが仏と言いますが、そ

の仏の奥さんが大変に恐しいものに見えるらしいのは悪い事をした仏罰でしょうかね。

又お酒痒くなるのを知りながら
正月の帰省へしもやけあわて出し
裁かれる顔で待ってる顕微鏡
脱線の後始末する保険証

## 先生が走る師走

河井庸佑

特集原稿の寄りがわるいので、あす取りに行くから今夜中に書いとけ、という編集部からの電話である。

発表のできる範囲で〝おもしろい〟ものをという注文なのだが、やはり職業柄ある程度は制約されるのでご期待にそえないものより書けないようである。

秋もおわり、師走を迎えると俄然忙しくなる。二学期の総決算でもあり、児童にとっても親にとっても最も関心の深い通知票作成という仕事にとりかからねばならない。

二学期は、夏休みで遊びぐせのついているのを、やっと軌道にのせ授業がスムースに進むようになると、こんどはやれ運動会だ、遠足だと学校における大きな行事が待ちかまえているのである。これがすぎると灯火親しむ秋をむかえ、そして十二月、この間の児童ひとりひとりの成績はもちろんのこと、学校生活における行動を評価しなければならない。

一学期末の教育懇談会において、ひとりひとりのその長所、短所を話してあるので、児童も親もそれにもとづいて多少なりとも努力をして二学期を過ごしてきたわけである。その努力を考えるとき、たとえひとりたりとも、なま半過な評価は許されない。テストの評価でなく日常の成績等も考慮しなくてはいけない。ひとりひとりの行動面も絶対評価していく。これは日ごろのデーターをもとにして書きこんでいくのだが、五十人近い児童ともなれば、いささかうんざりせざるを得ない、

しかしこれを仕上げ通知票も完成し、親との二日間にわたる懇談会もおえると、官庁より早く二十四日の修業式を迎えご用納めとなるわけである。それから二週間、来年一月七日までは、師走のあわただしい町の空気をよそに、のうのうと暮らせるわけである。

先生も労働者？である。師走ともなればボーナスの話がある。われわれの要求貫徹のため組合本部から闘争日程が流され動員がかかる。組合員であるわれわれは参加する。授業は進めなければならない。年末闘争もやらなければならない。懇談日までに成績表は仕上げねばならない。

やはりご用納めがくるまでは目がまわる十二月ではある。

だから「師走」というのかなとも考えてみた。

## 千里眼

川岡霊眼子

川柳をやるのに、むしろ幸いな事には人に多く接する霊学の千里眼をやっている。千里眼というと、多く易者と間違われやすいが易者は筮竹と算木を並べて技工的に見立てるが、千里眼の実験の多くは霊感の特異能力者で、神がかり的神秘のムードの中で行なう。サイコキネシスと言う人もある。

辞典には遠隔を計り知る事が出来る、人事の未来の出来ごとを透視し、予言する。神秘な能力がある者と書いてある。英語では「クレアボオイアンス」と言い、立派な国際通用語が付いている。外国人にもおるが日本では女性まで加えて十二、三名もあるだろうか、

極めて少ない。一対一の秘密相談で別室に入れる、迷える羊が、人生途上において、自己の進路を指示され、その求むる方向を定めるため訪れるのも欲求の自然の道であろう。

千里眼をやっていると、世の中の変遷がとても激しくまた煩わしい人の動きの深刻さが目立つ。私の職歴、人事苦情相談、人生案内は、最早二十カ年以上も続いている。最初は宗教の最高の管長の職を文部省宗務課から認証して貰って、それに奉仕し、後年に個人営業に這入り、霊眼視と号した。いつとはなし世間の人から千里眼さまと勝手に職名を付けられ、いつしか自分もその名と、その職に甘んじてしまったわけである。

今回川柳塔編集部から、職業から見た師走風景と題した原稿のご請求受けて、いささか面はゆい感じもするが、世の多くの人々にはかなり好奇に満ちた職業でもあることは事実であって、お訊ね相談に来る人は、番台の上から全裸を覗かれている感じがするだろう。

貴賤貧富を問わず、人の心を裸にする職業であるからだ。もしも、この相談の各自の内容を壁一重向うから盗聴して刊行書に纏め、発行したならベストセラー何十万冊売れるか判らないのである。〃教祖にも班長持ち込む忙しさ〃私の相談の一日も暇な時というのはない。男女大体半々の訪れで老若まちまちである。

相談時間は一人当り二十分間位から三十分間位で早い時は五分位で済まされる事もある。相手が訊ねる事を言う前に、お筆先で先に紙に書いてしまうのだから勝負は早い。大臣、知事、検事、警官、政治家、相撲、俳優、事業家、商人、官吏、職人、学生、中には悩みの相談相手になっているはずの、民生委員や母子福祉主事や易者も悩みの相談に来るから皮肉である。

おおよそ人は皆〃産から死へ続く歴史を持っている〃だから、一応、皆相談に来ると思って見てもよい。産まれない前の胎児の名を付けに来たり、早爬する女に情夫が、しょげてついて来たり、転落の一歩手前の娘や、人妻が相談に来たり、男女何れかに、もて過ぎて困るから、どれに定めたらよいか。夫または妻が性欲が激し過ぎて困るので如何にしたらよいか。また誰の児か判らんのでどの男の子と定めたらよいか、つまり〃畳べり摘む純情ではらみ居り〃未亡人が隠し男を持っているがそのままでよいか。夫が妻の実妹と関係しているがどうしたらよいか。陰毛の生える道。親不孝の子供の直し方。食えんから働ける女と浮気して男「めかけ」になっている夫を怨む妻。お代りが出来たので別離、言出した愛のない話。〃三角を丸めてくれとは無理な事〃川柳の起こりは三角関係で妻の嫉妬がひどいので訓話をしてくれというのである。人さまの夫を奪っている癖に嫉妬で来る女。五、六人もの子供を産ましといて倦怠期が来たと逃げ出した夫や、また、妻の場合。別れ話にどれ位、金子を貰ったら割が良いかという場合の男と女。盗癖の直し方。パチンコ道楽の直し方。酒のみの直し方。ホラ吹きの直し方。ひどいのになると、逮捕からどの方向に逃げたら捕縛されずに済むのか。食えんから浮気した話。死んだが良いか躯を任したがよいかの女。丙午に悩む子。嫁と姑との折合。実家の様子が知りたいアメリカ人。病気の個所とどの医者を選ぶがよいか。出産児は男か女か。かく多種多彩。

年末の総さらえともあって見れば、年末決算のおぎなえず、代価支払金や、返さずに許して貰える負債の分析。来年の業績向上と、金融面の有無。年越も迫るに出稼の夫や、子供からの送金はどうか。来年は帰るか生死不明の逃亡者の安否。裁判の年越を憂うる者。来年の選挙とその当落。家の売却と整理。その反対の立場で、困っている世状を縫い込んで儲ける投資と土地買受見通し。家出に離婚などの相談が数を増して来る事は毎年と変わりない。川柳の風刺は実地で行っている霊眼子の今日このごろと師走は相成候。

# 秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

**総理不図手持ぶさたな眼鏡もつ**　（木耳）

この句は佐藤首相のスケッチのようだが。佐藤さんという人は、すこし聡明すぎて民衆がついて行けない。政治向きにどこといって、文句をつける訳ではないが、そんな気合がするのである。眼だまの大きいのは、今となってはマイナスだが、勇断に欠けるところがあるのはハッキリしてきた。

議場の答弁にも、威圧したような云い方をするかと思うと、「調和」というような、不徹底な標語を打ち出したりする。万事が不徹底

この句の「手持ぶさたな眼鏡」は、この不徹底な総理を諷しえて、頗る妙ではないか。

だが、総理ふと、とあるこの句は、議場ではないらしい。

**込みあげて声にならない秋ごころ**　（阿茶）

秋という季節を叙歌し、諷詠した句は、数限りなくおおいが、どれも、風物をそれなりに伴っている。そして引き入れるものをもっているが、この句のもち味は女性的だ。「込み上げて」がまず抜群。

句そのものに、訴えるものを湛えていて、どこかしら、知性のにおう句だ。

**二つ三つ辛抱をして一つ買い**　（水車）

新らしく家庭をもてば、欲しい物は、どれもそろえたくなるが、月給生活者には経済がもてない。この句のように、一つ、一つ買い整えるしかないが。この句は、それをリズミカルに、諷い上げて、句にユーモラスなところがある。こんな句を見ると、人生が愉しくなる。

川柳を、説明的にしないためには、このような用意がいる。ちょっとしたコツだが。

**すすきの穂こよみ通りに顔を出し**　（一栄）

秋の野をシンボルするすすきは、日本という国を代表するかとさえ思われる。山野に自生して、このくらい季節に従順な植物はない。昔から、旧盆の頃には顔を出すかと云われ、お月見の頃は全身つややかな姿を見せる。

その姿は、手をもって招くにも似、風にゆられ、波にただよう趣きさえある。

この句は、その薄が、きわめて敏感に、姿をあらわすさまを、キャッチした、平凡ではあるが、好感をもてる句だ。

**連れと来てみてもこころは独り旅**　（花宵）

この頃は、気儘な旅といっても、大抵同伴者がある。たとえ、境遇は同じような人達でも、趣味もちがい、性格もちがえば、ところは別々になるのを免れない。ただ笑顔で応酬するだけという、あわれさを、この句はたたえている。中年の人の待ち味か。

なんとなく心ひかれる句ではある。

**金策へぼんやり影もついて行き**　（桂仙）

金策というものは、いやなものである。

さて、無いとなると、有る人も貸してはくれない。途方にくれるほかほ、ないものだ。人生にいちどでも経験のある人ほ、この句は分かるであろう。

但し、手形、手形で走りまわる人もあるから、いち様ではない。

この句は、亡くなった豆秋ばりの、ようなところがある。

**どう見てもきれいと云えぬ月の裏**　（三　司）

ソ連だか、アメリカだか、月の裏側をのぞいて来て、写真やテレビで紹介されたが、ブツブツした泡つぶのようなものばかりで、興がさめた。科学者というものは、物好きな者だと、感じたことを憶えている。

あえて、科学の進歩を、揶揄するものではないが。しかし、どうする気だろうという気もする。そんな吾々の気持を、この句は、うまく摑んで、冷やかしているのである。

**休み明け教師はチビリチビリ締め**　（代仕男）

九月一日、夏の休暇明けに、登校した学童は、どれもこれも、だらけ切って、学力はあと戻りしている。教師たるものは、これを元通りにするには、机を叩くムチの数も、ふえようというものだが、練達の教師は、「チビリチビリ」締めて行くのである。

「チビリチビリ締め」が、利いていて、その場に臨んだような、感覚がおこる。

**昇進へあとからわかる裏話**　（庸　佑）

職員の異動期をむかえると、昇進するもの取り残されるもの、左遷をくうものと、とりどりだが、祝杯をあげて、昇進者を見送ったあとで、うら話をきくのほ、残留組にとってシャクなものだ。

トンビに油揚げをさらわれた、ような、気もちが起るにちがいない。

この句は、その「裏話」に味をもたせたところが、面白い。

**これですなと虫歯へさわるピンセット**　（伊三郎）

アメリカのクリーブランドでは、歯科医の治療費が高いため、虫歯をこらえ、アスピリンを噛んでがんばったが、とうとう痛さにたえかね、発作的に自殺をしてしまったという話がある。これは身寄りのない老婦人だが。

虫歯ほ、いたいらしい。ピンセットで触られると、とび上りそうになる。そんなこんなを思うと、この句はなかなか、急所を衝いた句だ。

「これですな」が、用語を生かしている。

**事業不振晩酌の日が多くなり**　（多久志）

事業者の心理というものは、倒産寸前に追い込まれると、芸者の膝を枕に、酔いしれて眠るほかはないものだと、聴いたことがある。

それと、これとはかわろうが、この頃の財界の変動期に、事業の不振は、手の打ちようがないことも考えて、しみじみと味わう句だ。

晩酌ほ、おそらく独酌であろう。こんなときには、頼りになる女房なら、お酌の一つもして呉れるのだが。

但しこれほ、面白くみた川柳眼である。

**拭く汗は事務所の中へ持ってゆき**　（芳　朗）

ありふれた句ではあるが、句のもって行きかたが、おもしろいとおもう。

わざとらしくなく、ごく自然に、ふく汗を事務所のなかへもって行ったと感じさせるところに、ウイットがある。

素材ほ古くとも、自然さを失わぬ、正直な事実ありのままを、再現する工夫があれば、平凡な題詠も、創作になるものである。

**遠雷を聞いて行商まだ廻り**　（旭　峯）

遠くで雷が鳴る。雨が降って来そうだ「どしや降りになるかしれない」こんなとき、行商の人は度胸ができていて、あまり慌てない。「ハハアかみなりが鳴ってるナ」とごく、自然に片付けて、あし並みを乱さない。

この句は、古風な行商人を思わせ、無量の味がある。この句も、仕立てかたで、そんな気がするのである。

**稲妻に浮く大仏殿の巨きさ**　（春　己）

無技巧の句だが、景観の雄大さにひかれた夏の夜の大仏殿は、昼の雑沓にひきかえ、ずっしりとあたりを圧している。

その人も、山も寝静まる山門のあたりを、白くはしる稲妻の明かるさに、大伽藍は、魔物のように見えたであろう。無技巧の秀句。

★

大萬川柳訂正—10月号52P3段19行目は貝塚・水魚。11月号50P4段9行目は大阪・弘生

# 紫の椅子を羨む

## 橘高薫風著「檸檬」評

東野大八

六年ほど前だったか、お元気なころの路郎先生へ

「橘高薫風という作家は、すばらしい。いまに川雑を背負って立つ人になりますよ」

といったことがある。

「君もそう思うか、あんなのが五人、いや三人居てくれたらなあ」

と先生が真顔で答えられたことがある。

その彼の句集「檸檬」（れもん）を、通読して、かねての予想にたがわぬ好作家であることを確かめ、私はひとりあたり見回して、上機嫌になり、傍らの妻にさえ

「いい句集だよ、君も眼を通して御覧」

と言い出す始末だった。

私はこれまで、数多くの句集に眼を通してきたことだが、ただの一度も、本気になってその句評を書いたことはない。だが、こんどだけは、いまこれから書くようなことを、書かされる、という破目に、独り陥る始末となった。

薫風という作家を、いつとはなしに注目しはじめた。私の意識外の意識というか、そういった心の動きを、いまじっくりとせんじつめていくと、それは、かっての日の私自身の若さへと結びついていく。

若いころ、私ほ重症の文学青年だった。新感覚派時代のころの横光利一が

「あつ、紫だッ」

と一人の女性に対し魂の叫びをあげた一郎にぶっかった個所があった。この横光さんが大陸へきたとき、若い私ほインタヴューをとる膝頭のふるえをどうすることもできなかった。「旅愁」に出てくる〝東野〟というのはそのとき私のさし出した名刺からとられたものである。その旨のハガキを貰ったときには天にも昇る心地で、その紙片を長いこと机の前に、ピンで貼りつけておいたのだ。

余談になったが、紫のイメージは、そのように強烈な光芒を放って、今も私の心の奥底に、けんらんと輝いている。

だが、ある権威のある教育者の話に、親のないような、愛に飢えた子は、つねに紫色の絵を描く、というのが出てきた。飢えたる愛のシンボライズされたものが、この色か？愛は知的なものへの飢えでもあるのかそれとも肌合い濃い人の世への渇仰なのか、ロシエルは〝飢えたる青春の飢餓〟という言葉を用いているが、私のかっての日のこころの奥底にほ、湿潤したその心の飢えがつねに潜在していたことはたしかなようだ。とめどなき寂莫のなかの放徨―。

薫風は、そういった私のかっての日の、心の風雪と、ほぼ相似た拠点に立って、黒髪なびかせて、ある寂寥に胸痛めつけられた若者ではないのか。それは文学か、恋か、人の世か。

―**惚れている女〝筆はどこですの〟**
―**デスクマスクやっぱり俺は俺という**
―**豆しぼりお侠な恋がしてみたし**

これが、三十台にかかったころの私の句であった。はなやぐような中にくぐもる、哀切―思えば私という男は、今日に立つともはや昨日への郷愁に立ちどころにかりたてられる。薫風の句は、それと同じ風が吹きわたっている。その奥底には、誰とも知れぬ、エリートの香水をふりまいたペーソスの流れ。

―**恋人の膝は檸檬のまるさかな**
―**恋なれやわれに鬚あるごとし**

―花の香を嗅ぐ顔をして接吻す
―乱れ髪式部の世より恋は憂き
多情多感な、一人の若者のうた、そのみずみずしさ。もはや、言うすべもなし。
―春風の渦に吹くごとき懸想かな
―墓の前刻去るままに去らしむる
―生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん
この三句の感覚はS・モームの作品のようにすばらしい。
この作者は、日記体の但し書の句に出色のものが多い、この種のものは総じて深味と味に欠けがちなものだが、彼はその対象のもつムードの把握がまことに巧い。
小出椅重展
裸婦の像わが頬にかたき無精髯
友人結婚
千万の睫の中の睫かな
阿波踊
鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ
東京オリンピック
ひた走るアベベ仏陀の相に似る
薫風の世相批判ほ常識人の折目正しさで、サラリとしていてアクがない。それだけに、ドミエの漫画の如き味合いがある。
―政治家の顔は自然と相容れず
―労働歌蟻がうたえば凄かろう
―弱肉強食鰯皮の鞄持ち
―学生を矢面に立て国貧し
―落選の酒は問答無用なり
―鶯の啼く庭に来た執達吏
―六法全書の重さと聖書の重さ
まだいくらでもある。書けば、句集すべてを書き連ねていかねばならないので、割愛せざるを得ないが、海女や、鳥取砂丘、そして十二月の句に秀句、名作が多い。私は、これからも、折ある毎にこの句集をひらき、慰めの日々の糧としていくつもりだが、巻頭にある一句にこうある。
―人生譜柳は日々の風を見ず
彼は自然の中の生身、人間のただ中の孤独世俗の底の哀感を、どうこれからの句日記に書きつらねていくか。私ほ薫風を終生注目していきたいと思う。この人が四十五となり五十となるとき―そうだ私ほ五十の時の薫風の句を見て死にたいとすら考える。
正直にいって〝この人ほ短命なのではないか、句が鋭くそして冷たすぎる〟とそのかみ思ったことだった。しかし、当分、その心配はなさそうだ。
過日路郎忌に彼と茶をのんだとき、彼はためらいもなくレモンスカッシュをのんだが、いかにもこの人らしい、と私ほ感銘したことだが。私はそうした彼に、果実の貴族レモンの、誇り高き気負いの情熱のまどかさを感じた。―紫の椅子の愁いはわが愁い―最後に、五十歳の薫風に私が期待するのは、レモンの心で句心に腐ったバナナや、トマトや、いもまでが入りこむ人の世の〝錆〟を身につけた彼に大いなる希望を抱くからであろう。ともあれ、川柳塔の今日から明日は彼の双肩にあるはずだ。いや、独り川柳塔ではない、私の欲する最大の柳人として、いまに日本柳壇の輝く太陽となる人だと信じる。まさに視野無限（路郎序）である。（ちとほめすぎたかナ……）呵々

## 雅号ぶっちゃけばなし（24）

さんりんぼう

うすい

臼井三林坊

中学時代国語の読本に「人をかえ出して井戸がえしまいなり」「筍は盗まれてから番が付き」などの古川柳を習い川柳が好きになったものです。当時中国民報（今の山陽新聞）に投稿して二等になりました。選者ほ鳥山一歩さんだったと思います。学友に投稿をさとられまいと付けた雅号が三林坊（さんりんぼう）なのです。小学生時代腕白で木登りをしては落ちること何度も目をみつけ（気絶）て母を心配させた事にヒントを得たものです。以来三十年少年の頃に付けた雅号を守り続けています。

或は川柳をボウドクする雅号と非難致しますが垢抜けた雅号でつまらぬ句を作るより名前負けせず結構永持ちが致します。

「川柳たましま」も六月号で百号を記念する事になりました。十九平恵二朗先輩の指導を仰ぎ千翁、里風承平、朝二、三辛堂などベテラン会員百名よく助けて呉れ柳魂を磨いています。奇名にして奇名に非らざる弁以上。

農業（四十九才）

（川柳戦国志・六）

# 上杉謙信

## 長尾景虎

上杉氏は、平景政（鎌倉権五郎）の子孫で景政の後、五世景弘が長尾氏を称え、長尾氏は嗣が絶えたので、上杉藤景（藤原氏）を養子にした。藤景から十二世が為景、その第三子が謙信である。

越後春日山（高田の西北）の城主であったので、

奈良は鹿越は虎すむ春日山（一三三15）

と詠まれている。

謙信は、はじめ景虎といい、後に輝虎と改め、薙髪して謙信と称した。それで虎の棲む春日山と洒落ている。

越後の虎は青竹を杖につき　（七九28）
ふくなすすめと輝虎は竹をふり
（一〇二19）

また、梁の常叡の竹如意に擬して、常に三尺の青竹を麈にしていた。「ふくな」は引くなの方言。

## 富士野鞍馬

けんしんのおちど不動をくらわせる
（安六天1）

謙信ある時、鶴ケ岡八幡に詣り、忍の成田下総介長安を打ったという話があり、その成田を「不動」と洒落た作。

北風がつよいで杉がおっぺしよれ
（七二14）

天六二十一年（一五五二）管領上杉憲政は北条氏康に追われ、越後に赴き、謙信（長尾景虎）をたより、管領職及び上杉の族称を譲った。この時から輝虎と改名したのである。

くわんれいのりんしを持て居候
（安六宮1）

やう父のおしうり越後をさして行
（安九礼3）

と、それも川柳は詠んでいる。

## 好敵信玄

謙信は、兵法を宇佐美定行に学び、天文十二年（一五四二）早くも三十六才で越後一国を収め、京都に参内し、加賀、能登、越中等を攻略した。甲斐の武田信玄は好敵手で、信州川中島で屢々戦った。その敵武田へ塩を供給した事は、義侠の人として物語りになっている。

甲斐に塩とは腹のいい武将也（一〇三22）
りっぱなり塩をはこぶは越後もの
（明六桜4）

義の肝を謙信塩で磨きあげ　（一一一20）
塩をやる手紙は長雄流で書き（一三二10）

謙信が信玄へ書を送ったことは、信玄の項で述べたが、それを謙信の姓長尾にかけて作られている。

川中島合戦（別項）は、前後五回に亘り、ついに勝負はつかなかった。

鬼山城の見世を張る越後勢（一三三6）

越後方には、直江山城守兼続が居たので、それを吉原の張見世にたとえている。

二度目の川中島合戦に、謙信は単騎、信玄の本陣へ跳り込み

大あづき団扇へあける川の中（五八17）

と、小豆長光の太刀で信玄に切りつけた。信玄はそれを軍配扇で受けたが、二の太刀で腕に軽傷をうけた。

三度目には、甲斐勢の炊煙を見て、明日の来襲を知って逆襲した。

おひだきを見てけんしんは小うなづき
（安四鶴3）

この時、車がかりの攻撃で、

川中へ車を出す越後勢　（一一五31）
川中でうづを巻てる越後勢　（九七14）

# 痴盲録

――（4）――

高鷲亜鈍

田中澄江の渦潮で林芙美子が、少女時代住んでいたということで、尾道市が全国に知れわたった。広島県下では一番古い市でありながら、瀬戸沿岸では屏風のような山に隔てられた港町で、神戸市の十分の一にも充たない狭い土地では、市を富ます何の産物もなく、年々赤字予算を計上している仕末である。

はやくから家のタンス屋を養子にまかし県会議員から、一昨年の市長選挙で新市長となった松谷勝氏は、その時の渦潮ブームを利用して、林芙美子の母校である現在の市立東高の門前に、芙美子の詩碑を建てたり、市の図書館で、芙美子作品展を開いて喧伝するから尾道銘菓渦潮饅頭が売り出されたりする。そして市を挙げて、観光都市に甦生さして、全国からの観光客誘致手段を、あの手この手と講じたが、それが、尾道市政として適当であるかどうかは知る由もない。しかし今では渦潮ブームが去って、実は私としては胸をなで降した次第で、果して、林芙美子が死んでからでも、これほど世間に騒がれていい作家であったか、詩人であったかを疑う。

生前から林芙美子を一流の女流作家と思えなかった私は、死後こんなにまで騒がれ私行上、とかくだらしなかった女性の碑を母校の純真な女学生に、朝夕拝ます市の観光客寄せの手段とするのは、もってのほかだ。われらの師麻生路郎が尾道市十四日町の産であるを知る人は尠い。

私は、私の目が良かったら、市の有志に働きかけたり、先生を知る全国柳界の方々による御後援を願って、今は市の中央にあたる長江口「千光寺山ケーブルロ」に先生の句碑を建てる運動を、おこしたであろう。今はそれもならず、どなたか私の意志を継がれる方が居ないだろうか！その方が観光都市尾道市としては、人に聞こえても恥ずかしくない立派な遺跡であり、市の面目これ以上に勝るものはないだろう。

☆

いやながら林芙美子の土地に住み
曇天の皿へ欲情消えやまず
気の強い女となって夜の勤め
そっと抱く着付けくずれがせぬように
かげ口は酒と女のせいにする
昼と夜のまんだら網にぶらさがり
慣れたつもりが便器へつっこみ
事故死への恐怖おもわず足すくむ
いのちとりの癌がましか盲がましか

越後勢廻り灯籠のやうに押し　（七六8）

勝どきに甚九も交る越後勢　（一三二7）

などと詠まれている。「車掛り」というのは先陣、二陣、三陣と、次第に廻って攻め掛る軍法である。これをまた、江戸の越後屋にかけて、

越後のけんしんかけねなしのいくさ　（一七17）

町人としても謙信すさまじい　（安七松1）

越後屋へ車がかりの仕入来る　（安八梅1）

と戯作されている。

天正元年（一五七三）には信玄は死に「わが好敵手を失えり」と嘆じて涙を流したのであったが、それから五年後の天正六年（一五七八）三月、謙信は四十九才で没した。これから逆算すると、享祿三年庚寅（一五三〇）の出生ということになる。

×

けんしんがへのこ小便ばかのやく　（安六仁6）

と川柳に詠まれ、謙信は終生女と交わらなかったので子はなかった。後の米沢藩主上杉景勝は養子である。


直原玉青著
「新しい南画と俳画の描き方」
創元社出版
価二千円
本社でも取次ぎいたします。

# いのちある句（7）

戸田古方

（七）**たより**

そのふるさとのたより。お母ちゃんはどんなに待ちこがれていられることか。

〃ふるさとのたよりに柿の赤いこと〃

（八）**きっぷ**

汽車のなかで走る人がいるとか。信ずる心のきっぷ一枚にじたばたせずとも。

〃寝台車乗るなり寝れば着いている〃

（九）**みあかし**

ふるさとのたよりをきき、たよりを見てもこの眼で見られぬ魂の世界の事は何となしに不安。

〃新聞に出れば真逆と疑わず〃

（十）**まもり**

山も川も草も木もふる里の名に於てあらゆる誘惑から守り通して下さる。

〃糸くずの中から糸くず捲きとられ〃

（十一）**はからい**

魂は魂でふれる以外に方法はない。欲の塊りであるこの心に共感を求めるには魂の母あるばかり。

〃欲望の研究をしてこはくなり〃

（十二）**よろこび**

魂の母にふれ得たよろこび。御説法が終って静かに釈尊の前を退出する弟子達。

〃この心一つのために仏法僧〃

引用の関係上、前書も幾分短かく、句も一句に自選しました。この詞書である前書をとってしまって、はたして、「川柳仏説阿弥陀経」と題をつけられるかどうか。

**川柳仏説阿弥陀経**

燃え移る軸木と問答してみたい
イロハだけ書けて唖の子「オカアチャン」
無量寿を抹香臭くきき流し
近づいてみれば青芝禿だらけ
極楽といえばみせろとせがまれる
赤んべをすればするほど可愛いい手
ふるさとのたよりに柿の赤いこと
寝台車乗るなり寝れば着いている
新聞に出れば真逆と疑わず
糸くずの中から糸くず捲きとられ
欲望の研究をしてこはくなり
この心一つのために仏法僧

これでよいならば連作で表現が可能であるというところまでは来たわけです。

「川柳塔」第三号の三三頁三四頁に西田柳宏子さんが「ボーナス雑感」を諸家の句によって書いておられます。

○支給額決定

**旗振ッた割にボーナス上らない**　庸佑
**ボーナスも決り映画に居る師走**　日満

○懐勘定

**ボーナスが足るかと思う妻の夢**　柳宏子

○支給日

**ボーナスを両手で受けるに軽すぎる**　弘道
**ボーナスが懐にある靴の音**　祥月
**ボーナスを貰えば欲が一つ増え**　祥月
**ボーナスが素通りをした注連飾**　和三郎

柳宏子さんはもう少し沢山引用されています。筋を通すため省かせていただきました。

**ボーナスで手術する気のままで逝き**　珠笑
**ボーナスの重さを女手でまねき**　六竜子

など加えると色合いが増してもきましょう。そして柳宏子さん自身、しめくくりの句をのせていられます。

**世情騒然ボーナスもゆれにゆれ**　柳宏子
**あてにする程ボーナス来てくれず**　柳宏子

前の句は社会性が強く、あとの句は個人的の臭がします。十七音字で全てをいいつくすことはやはり無理なのでしょうか。

同じ「川柳塔」十二月号の四三頁に小畑自由朗さんが「川柳漫釈」をかいていられます。喜劇のシナリオライターである自由朗さんは一句からたくみな寸劇を引出しておられます

「おいウ、あわてるのもたいがいにせんかい」

「そんな事云いなはったってあんた」

「阿呆ウ、座ぶとんやないかい、トランクへ詰め込んでどないすんねいな」

「そういうてはるあんたこそ」

「呀ッ、こらいかん」

「トランクがニャンニャン鳴いて動き出しよりましたがな」

**駈落ちのように危篤へ荷をまとめ**　桂仙

自由朗さんは自有浪といっておられた戦前さきの「川柳雑誌」二一五号に。

「いてエッー、ちくしょう、こらッー、待ちくさろ、ひとに石なんぞぶつけくさってやーい、そのハイキングのオンタとメンタふんづかまえてくんろうやーい」

**かがしかと思えば生きていた真昼**　孤　篁

全く見事なお手並です。この程度までは川柳といえる程の句なら可能です。それ以上はどうでしょう。

# みちくさ

山上千太郎

わたしたちかっての川柳同人誌「ねこ柳」の第五十四号、昭和七年五月発行のものは、博覧会記念号と肩書をつけて、一つの川柳大会の模様を報じている。

名園、兼六園はあたかも桜の満開「産業と観光の大博覧会」がこの季節に大規模に開かれていた。このとき県下各川柳社聯合主催での「博覧会記念川柳大会」というのが、金沢市の仏教青年会館で盛大に開催された。参加柳人約七十名、この内に、はるばる大阪から列席された、路郎、緑雨、かほる(高橋)の三氏のお顔が会のふんいきを盛り上げていた。小松からは例によって思茶郎(茶仏氏)ら常連六名が出席している。その頃の県下柳界は小松が主軸をなして各地に支部があり、それら柳社からも多数の参加が見られた。大阪の若葉会と小松のつながりも深く、白柳、小松園といった大物が大いに「ねこ柳」を守り立ててくれたものです。

さて路郎先生はこの席で「春日雑話」と題した講話をしておられる。この日の兼題二つは北国新聞の銀波楼氏と久流美さんが選をし席題三題は大阪の三氏、残りは地元の兎月、みどり葉ら六人で責を果している。この大会も六時半無事終了、席を浅の川「ごり屋」に移し、有志で路郎先生外の歓迎の宴を催した。先生はこの夜金沢に一泊、翌十八日には久流美さんと二人で小松に見えられた。編集の記にわたしは書いている。—路郎氏の言われますに、ぼくの血は小松に通っている—と酔いにまぎれて何度もこんなことを口にされたように思う。久流美さんを通じて小松柳界に期待するものがあったのかも知れん。この日はあちこち飲み歩いて御機嫌だったと、遠い思い出がある。かえりは加賀のどこかの温泉に寄られたのではないか、そこには緑雨さんたちが待って居られたと思われる。

◇

ところで、この年昭和七年十月二十二日の夜半に映画館から出火して、小松町橋南の中心地を九時間にわたって燃えつづけ、過去に例を見ない、焼失家屋一千百戸といった記録をつくってしまった。罹災した同人六名、柳友も十五氏に及んだ。小松というちっぽけな北陸の町が全国に知れ渡った。不当に過重な宣伝費によって。このため各地から沢山なお見舞の金品や慰問句をいただいている。

そのうちの二、三を抜き出して見ると、個人としては、菊沢小松園氏からのお見舞金、久流美氏から慰問の句、阪井久良伎氏から御染筆、おとなりの大聖寺聖城川柳社からも十六氏の句と見舞金がとどいているが、光郎、味平、両氏の名はこの時まだ見えない。又国民川柳会(東京・三太郎氏)から「廿日(十一月)の句会を御地慰問の夕べとなし……略」のわたくしあて私信に添え二十七氏の句が送られて来ている。○丸さんなど懐かしい故人の名前が見られる。

も一つ若葉会のものも見逃がせない、金品は勿論、ここでもわざわざ慰問の句会を開いてもらっている。お集りの方々の中に、豆秋南柳、緑雨氏や琴人、鳥語の両氏、白柳子、実弟の友帆、葉平、かほる氏ら多士、充実した句座であったと推察出来る。

さて、記念川柳大会の事からなぜに大火にペンを運んだかというに、前回緑雨さんの出席された金沢川柳大会は何年頃だったか?……が、昭和五年の四月であったと判明したからです。

小松には五年の三月二十八日の橋北の大火と、この七年のものと前後二回火災の洗礼をうけていて、しかもそれが、両川柳大会の年だといった因縁をもったからであります。

# 近作柳樽

川村好郎選

見えぬから夫せつかちな指図する
灯りもう要らない夫のいとおしく
減らす気の食事へ箸はさきにくる
高のぞみするなと子供へ欲をもち
泣けそうな夜は日記を味方にし
信じ合うただそれだけのむずかしく

島根県　堀江芳子

常套とは知りつつ涙に負けてやり
油蟬命の限り鳴くさざめ
つぎたして行く愛情で恙無し
見られたい意識へ女は羞恥する
空ろなる心にリズムだけはずみ
今日もまた歪む器に水は耐え

西宮市　前田芙巳代

大阪市　和田痴亭

金貸しに実印任かす不甲斐なさ
男なぞもう要りません花鋏
豊満な腕鼻先へ混むメトロ
バラ展の短いいのち咲きほこり
酔うている女さかりにある魅力
耐えるにも限界があり疳の虫

下関市　志賀木石

出世もう言わず長生きしてと妻
たわむれて妻の手握るほどに癒え
ぬる湯好き遠慮ととられゆでられる
動いたら寒いしまい風呂貰い
よい方の足が痛んだおそろしさ

羽曳野市　谷垣史好

謝まればあやまり方にまたからみ
かしわ手打てば信心薄い音で鳴り

失意の日割筆真つ二つに割れず
退院の荷物小さな恋も秘め
幻想の島は光に満ちあふれ

大阪市　小谷葉子

適当にあまえて妻のおろかなり
パートタイム一息入れるモカの味
握手され冷えた心がほぐれだし
寄席に来て空虚な笑いをフト感じ
夢にまで女　女としての鏡あり

鳥取市　藤本鎮也

出世せず落伍もせずにいい親父
下手な字も故郷の便り苦にならず
物置きへ親の知らない猫を飼い
べんちやらが僕を貸さない気にさせた
ほんとうに常着で来ててあわてさせ

伊丹市　後岡としみ

憎めない嘘受付を叱るまい
常連にマダムとられてお勘定
適材を適所においたのが杜撰
電化とは別にいるもの蝿叩き
足し算をして食うすしの味気なさ

島根県　堀江正朗

手をひいてくれる子供の歩の広さ
明月を瞼のうらにかみしめる
夢みてるときは僕の目みえている
見えぬから留守をあわてる俄か雨

大阪市　古川集一

ロダンに魅せられ二人できたのを忘れ
老醜は見せず野菊は野で終り
秋淋し汽笛の音も挽歌めく
共稼ぎうつかり疲れたとも言えず

大阪市　江城功雄

脊を向けた友想う時雲を見る
馬車馬の強さが欲しい日の焦り
倖せはハンカチ白し妻ありて
落日の公園鍵つ子だけ残り

羽曳野市　高杉鬼遊

抵抗と逆に頭髪うすれゆき
不注意をとがめてくれる妻がおり
スモッグの空の月見は酒をほめ
たこ焼に内職の手もとめられる

愛媛県　関本柳剛

雨の夜の女の嘘はあからさま
内祝もう此の恋も世帯じみ
いつち聞きたいことに触れないまま別れ
呼び戻す奇蹟へ輸血管必死

大洲市　横田放人

夏ばてなどいつておれない稲がうれ
臨終へ当てる剃刀手がふるえ
やつと角とれて定年退職し
貸した金返してもらう頭さげ

松江市　鈴木壮樹

公害もなく山陰の空高し
ひさびさに父を味わう風邪の床
満月に腹の底まで見すかされ
停年の背広ハンガー斜めなり

尼崎市　中谷利美

何にでも効く母親のおまじない
ちよつぴりと突かれた親の泣きどころ
診察に来ても如才のない女将
欲しそうに云うから買えば叱られる

島根県　小砂白汀

新聞紙積る速さがおそろしい
仕事より泳ぎ上手が先を越し
ガラガラも一役つとめて治療室
断たれたる命が花瓶で伸び続け

広島市　上代美文

轢き殺した方も一生浮ぶまい
倦怠期猫とお話してござる
大臣は首になつても悪びれず
体育の日だと云うのにごろ寝なり

仙台市　平野光道

やはり仲間はずれのもいる猿が島
取調べ受けて汚職の酒と知り
恋成就ボーナスまでも前借し
二次会も割勘にして上司のみ

奈良市　村上春己

親子五人の重さ肩にくいこむ
食怠の鹿憎らしい面がまえ
客ついた写真屋鹿が来てくれず

高知市　田内文子

今日も又無事故で帰る夫待ち
女とはこんなに変る夜と昼
秋の夜がこんなに長い一人の夜

河内長野市　森本黒天子

師の胸像私を見つめるとこに置き
社を退いて若さ読みとる手紙が来
夢のはしばし未だに前職見せに来る

大阪市　小東琴女

女一人生きる打算は無理もなし
現代っ子のマナー明治の眼にあまり
欠点を善意でかばう瞳が笑い

米子市　林瑞枝

酔う夫へ娘の意見の手きびしい
熨斗つけてやるよと言って少し妬き
お上手が云えず機械の好きな父

大阪市　吾郷玲人

野菊にも似た清楚さにある魅力
つけ睫毛瞞すつもりが欺された
真面目さをやっと買われた五十才

愛媛県　鐙本満子

晩酌の量もいつしか妻が決め
ラブシーン地蔵伏目で見てござる
愛情の深さを計るサシが欲し

倉敷市　水谷谷水

持参金お脳のわいること位い
そうですともそうですともとおだてられ
姑のデモ孫をもう見ない

米子市　八木千代

聞くだけは聞きとしよりの顔を立て
海鳴りに神の叱咤の声を聞き
遠慮して引かれた皿を眼で送り

愛知県　槇紫光

髪染めた嫁が家風をかき乱し
おでん屋でおごられバーでおごる破目
汚職した胸へもつける赤い羽根

八幡浜市　山本初子

夢にでも貰って見たいダブル賞
兄妹で歩いてるのにひやかされ
半分もかくせぬ水着高く買い

羽咋市　三宅ろ亭

収穫祭受賞はどこかちがいあり
変屈はまつり込まれてほつとかれ
渡り鳥出稼村の空を飛び

大阪府　河本雪男

スモッグに名月どこか淋しそう

会計の顔で会計金を出し
パチンコにぶらりと入る一人旅

米子市　石垣花子

まぎれ込む団地で雀スター並み
人ごみに耳をかすめた国なまり
近づいた故郷知らせる丘の松

布施市　山下晴子

また一人姓が変つて便りあり
親不孝する気なけれどまだ嫁げず
突然の来客に造花生け

竹原市　小島蘭幸

松茸は今年も食べず子に送り
覚悟していても涙をかくせない
給料日月賦を払う日でもある

新潟県　高野不二

雨を乞い雨を嫌うて米つくり
名も知らぬ花を咲かせて嫁きおくれ
長靴の子に泥道が尚うれし

出雲市　王紫

ののさまとしての名月子に教え
栗の実の一つ大地へ還る音

天体の仲間外れか星が飛び

大阪市　石田正義

心境の変化保険を増額し
劣等感一杯飲めば爆発し
馬鹿遊び早速きつい請求書

広島県　南条露声

叱られてばつかり居ても親のひざ
叱られる方の理由は無視される
やれやつと買えばピアノは据えた切り

宇部市　櫛部いさ夢

女ふとじようずな口にある不安
けんかではなかつた関の魚市場
長老と云われる上座好きでなし

高知県　山川勝子

晩酌で日曜大工はげまされ
敬老の日も婆さんは孫を負い

宮崎市　野口卯之助

運転免許までもとらせて嫁にやり
こせこせと寝るが寝るまで妻動き

鳥取県　鈴木村諷子

哀しきはどなる相手が死んじまい

ビル街の雲にも秋のたたずまい
西宮市　船津千夏

雲の上の皇子も今は徒歩通学
味かおり松茸さえも減り申し
竹原市　三宅不朽

とぼとぼと動く灯とぼとぼ動く闇
子の出番までは辛抱するエレキ
広島県　高橋鬼焼

打ち明けてからかあさんがこわくなり
新人の力がこもる猪口を受け
龍野市　森下峰子

夏空へモデルの汗は冬を着る
ふくれてる台所茶碗のはでな音
千葉県　鳥飼春泥

雄弁がいてまとまらぬ婦人会
神様のエラーお鼻があぐらかき
松山市　西川みやこ

コレクションもつたいぶつて子にゆずり
設計へ予算が先に顔を出し
高知市　永野舞子

言いたい事まだあつたのに発車ベル
口紅が濃いと娘がアドバイス
八代市　永松道雄

殉教の夢の架橋に陽が昇る
一いきに吸いこむ山の秋景色
布施市　坂東若芽

コオロギが床下で鳴く秋の冷え
勿体ぶる話は先に知つており
愛媛県　豊島二九三

スリルもサスペンスもなく倦怠期
才女枯れ葉に何か話かけ
尼崎市　平井露芳

熟睡の余りは夢で間をつなぎ
お化粧はタイルでビルの顔が出来
羽曳野市　麻野幽玄

意気投合過去も肴にコップ酒
一人寝は窓辺の月も気にならず
七尾市　松高秀峰

貧乏に似合わぬ素直な子に育て
代表で叱られているあほらしさ
鳥取市　藤本佳女

美人とも言えずあなたはチヤーミング

虫の声あり砂丘の月に佇つ
京都府　菊沢破天

同じ音立ててうどんの客となり
これしきが上らぬ荷物年をしり
竹原市　時広一路

無事でなとテープに通う親心
妹が綺麗に見えためでたい日
島根県　石田清泉

天井の動かぬ蠅にある余命
毒舌が支えとなってすがる友
大阪市　西本保夫

盗難へベンチ座つたまま立たず
泥棒に三分の理とは全部盗り
大田市　藤田軒太楼

台風の飛沫物価にはね返り
境界のいざこざ長老呼んでくる
尼崎市　岡本昭三

ひまわりが廻り疲れた首をたれ
負けまいとホステス今朝も美容院
桜井市　岩本雀踊子

知性と云う邪魔者がある暮し
生きて行く後姿にある噂
仙台市　川村映輝

脱税で太り納税して細り
観光のついでに神様拝がまれる
大阪市　伝宝佐和子

親友へ無心の電話他人めき
松茸のかおりもしらぬ市場かご
岡山県　瀬戸山文平

日本と思えぬハイウエイ突つ走る
委細面談月給のことらしい
島根県　大森孝華

金策が出来たわが家の夜のなごむ
泣きつかれ入れた社員に裏切られ
カルホルニア　斎藤流露

交際が下手な男で女連れ
古いところが妻の妻らしき
高槻市　山田スミ子

よく稼いだ蟻にも冬がやつて来る

言うだけは言うて責任のがれとき
善通寺市　岩田昭順

同行の妓がいて誤解誤解です
特別被爆手帳交付さる
洗面へ原爆症の顔が揺れ
大洲市　堀内暁風

正直に話し思わぬ敵が出来
金出して虫を買うのも都会の子
北九州市　藤田独楽

新国際空港の位置きまる
三里塚へ四年がかりで辿りつき
幼稚園の遠足
母親が楽しみ仕事手につかず
ハワイ　上田紅渓

幼馴染布哇通つて寄りもせず
仲ようにやろうと握手の間の悪さ
鳥取市　近藤秋星

二人きり女の方が閉めたがり
頼まれたわけでもないに苦笑する
八幡浜市　別宮すき

女児誕生ピアノ月賦かけはじめ
虫籠から出ると鈴虫なきはじめ
八幡浜市　菊池美香

威張り屋の課長ペコペコ小気味よし
母の弾くピアノは君が代だけと知り
堺市　羽田一扇

昼休みだけは遠慮なく笑い
松山市　河本南牛史

手ごたえの未練を残し空のビク
京都市　小川紅光

排気音幼児のまゆがくるしそう
大阪市　武居寿美司

真黒き校舎のひとつ夜学の灯
堺市　斎藤亜也

買う時の意気込みもなく全集棚
茨木市　高木繁太郎

境内を中気安堵の杖をつき
善通寺市　伊藤歌子

獅子舞の子に祝儀ふんぱつし
布施市　晋本幸子

地に二羽神に召されてスズメ落ち

# 大和路、浪花、京の旅

阿部佐保蘭

**大和路**

遠く来て雨も亦よし奈良の街
雨垂れの音音音で古都は更け
松かさを蹴飛ばして行く春日路
サンキュウと鹿もお辞儀の東大寺
今拾うた葉（なぎの葉）でガイドする春日路
鹿と餌と僕を撮らせる東大寺

**興福寺にて**

雲慶の作にひとおり立ちつくし

**薬師寺**

仏法僧でも薬師寺の出て来そう

**雨の法隆寺にて**

有難く御由来を聴く法隆寺
記念にと石など拾う法隆寺

**大和郡山にて**

在りし日の憶い出霞む郡山
この雨で金魚が逃げた話など
郡山母校の歌を口ずさみ
佐保川を越え郡山近くなり
大和路も今は工場ばかり建ち
此の字に旧居をしとく郡山
蓮池に憶い出がある郡山
金魚の値覚えて帰る郡山
お別れのガイドへ拍手まだ続き

**路郎忌**

筆硯を洗い恩師へ改まり
先生に見せたい拙著がこの秋に
今までの雨を路郎忌忘れさせ

**薫風居にて**

鉾先も祇園を憶う宿の軸

**桂離宮にて**

十年は長生をする庭の苔
霞み棚忘れて鯉の絵を覚え
与謝の海桂離宮で憶い出し
石一つ桂離宮で戴いて
ぽっかりと月が出そうな歌月亭
竹垣に桂離宮の去り難く

**落柿舎にて**

落柿舎のいわれ聞いてる京の雨
落柿舎の主奥深く見出され
落柿舎で記念に一句書き残し

**祇王寺にて**

祇王寺で一人見つけしかぶと虫
祇王寺の桜は雲の上で咲き
祇王寺の孟宗竹へ撮らせたり
古すだれかけて祇王寺尼一人

**修学院にて**

この雨を幸いとして修学院
見ぬことにして少うしは撮ってよし
百姓を修学院で羨んで

**京都御所にて**

ガイドさん時代祭に出たお方
説明を聞かずにカメラ撮りつづけ
咲く頃に左近の桜来たくなり

**普茶料理**

赤椀をカラーで一つ普茶料理
くちなしを土産に貰う普茶料理

**大徳寺**

番傘もなるほどここは大徳寺
縁側で大木仰ぐ大徳寺

**いも棒**

いも棒の前で女房を一つ撮り
いも棒で幼い頃を憶い出し

**陣屋にて**

泥棒が仏間へ落ちる陣屋なり
説明へ陣屋で少し怖くなり
なるほどと陣屋うなずくことばかり
研究に陣屋へ来てる建築家
濡れ縁も楠と云う陣屋にて
水がめを床に埋めたる能舞台

**祇園祭**

提燈をカラーで一つ宵祇園
ともかくも旦那に任す宵祇園
無くなると聞いて出かけた宵祇園
宵祇園見せて貰った生ビール

**京番の句会に誘われて**

二回読む披講京都で教えられ
英訳の話チョッピリ披講する

# 川柳の使命

吉田水車

川柳の使命に二つある。一つは史学的資料一つは文学的使命である。そのどちらに重点を置くかはそれぞれの立場から異るがすくなくとも我々作家は二つに共通する責めがあるように思えるのである。

今日多くの川柳家、文学、史学の専門家が古川柳の難句解明に努力されているのは衆知の通りである。我々の作る川柳が後世史家を苦しめるであろうことを考ると傾向もゆるがせには出来ない。川柳はその本質から時代を反影するのに最も敏感である。人情の機微は必ずしも時代に左右されるものではないけれ共ある一つの事象を表現する場合時代のすべての様式によって雰囲気も異なるし特に作者の置かれた環境によって違って来る。

一つの労働運動を詠んでも失業者からみる眼と当事者からとではまるで観点が相違するだろう、生活（人生）を素材にしても時代相と言うものをぬきにしては成り立たぬことは勿論である。特にひねくって難解な句を作ったようにさえおもえる古句は当の作者にしてみれば、或はそうかも知れない点がないでもないが、極あたり前に詠まれたものであろう。

おかしみもいつの時代にあっても同じであろうがその構成分子がやはり時代の影響を受ける。

古川柳の時代は封建のもっとも激しいときであったし現代は民主々義言論の自由時代である。この甚しく遡った時代に生れる川柳の内容も亦、大げさに言えば雲泥の差があると言えよう。

きびしい制肘下の作句ではいきおい素材の範囲も狭く且つ固定化せざるを得ない、そうした中で史家を悩ます難句が多いのは、固定化から逃れようとしてとった一つの手法かも知れない。それからみると良識を建前とした自由奔放が許される今日の川柳の内容で後代に於て難解とされる句があるとすれば古川柳のそれとは又違ったものとなるであろう。

私が「使命」と言ったのは、かた苦しい使命観を言うのではない作句態度としてかくあり度いと希うまでである。（四一・八・二〇）

## 詠・近

大阪市　橋本緑雨

うつむいて歩く姿の背をたたき
若い嫁またもめてるなと思い
古稀がいつのまにかすぎて元気なり

須坂市　高峰柳児

弟子みんな師匠の恋にあてられる
賢妻のほまれ団地でうとまれる
貧農も豊作貧乏積みあげる
農休をＰＴＡに狩り出され
身体中叩いてすられたことを知り
曝首みたよに胸の透視する
封切らぬ文書が嵩む社長室
命日を思い出させる葉鶏頭

名古屋市　長谷川鮮山

箸忙し競走めいてとろろ汁
秋の良き彩をたたえてダムの水
余り切れるので剃刀の手がふるえ

小松市　山上千太郎

天高し日本に四季のある言葉
稲舟の水路明治がまだ残り
女子寮の時計の高さ止まるまま

松山市　月原宵明

# 川柳医家「忍者屋敷」へ行く

## ―芭蕉生誕の地・伊賀上野―

不二田一三夫

写真は恭子さん

大阪市南区医師会は（会長は中島生々庵主幹）ことしも10月30日の絶好の秋晴れの一日を伊賀上野へ恒例の秋のレクリエーションを催された。三台の観光バスは医家およびその家族の方々ばかりだが、本社からはぼくと小谷葉子くんが特別参加をゆるされ同道した。

中島小石夫人、山川阿茶女史、福井野迷路元軍医中将閣下という、かつての杏林川柳会の強豪がズラリとならぶところ、さすがに南区医師会は川柳王国である。しかも野迷路氏は〝川柳塔〟十一月号の巻頭を飾られたのだ「オダテといてオシリをたたくか」と野迷路氏は豪快な笑顔を見せられたが、なかなかどうして、かつての〝箸にも棒にも〟の伝説を吹きとばされたのである。

ガイドさんがいろいろ説明してくれるのだが、もうすこし簡単に「左に見えるのは何々です」ぐらいにしてもらえるとありがたいのだが、大昔の伝説をくどくどやられるのにはうんざりした。これでは都会の騒音とたいして変わりがないとおもった。若い看護婦さんらにも車内に流れる関西ラジオのミュジックのほうがよかったようである。

しかし窓外の風景が河内平野にかかってくると、秋色が濃く美しかった。柿の実が赤く白壁に映えているあたり都会人にはたえられない風趣である。車内はお医者さんと看護婦さんばかりなので車酔いしてもヘッチャラというわけだ。

バスが阪奈のハイウエイを走るころ、「生駒の葭乃先生はどうしておられるか」と小石阿茶のお二人から葭乃先生のお噂が出る。三

---

## きのう・きょう

本多柳志

◇べつだん新しい話でもないが、またまた京都の有名な門跡寺青蓮院の、重要文化財数点が保管責任者によって、ひそかに売りとばされていて、東京の質屋から見つかったと言うのである。しかも時効になっていて犯人については、べつだん法的には何の責任もない、と言うに至っては全くおかしな話である。悪智恵にたけたヤツほど得をするのが、法治国であり文化国と言われている、日本の実態のようである。昔の軍隊では盗んだ犯人は勿論のこと、盗られた方にもお目玉がとんだものである。

◇絶世の美女も毎日見ていると、さほどの美人とも思えなくなるそうだが、貴重な国宝も毎日接しているうちに、いつの間には宝物というような意識が、うすらいできてついつい監視の目が、おろそかになり、当局の保存管理の面にも、手落ちがあったのではなかろう

時間で俳聖芭蕉の生誕地として知られる伊賀上野へ着く。「俳聖殿」で小石夫人は芭蕉の葉をカメラにおさめておられたが、南画のご勉強であろう。阿茶女史は手を合わせて〃うまい句が作れますように〃と殊勝なところを見せられる。

忍者屋敷で生々庵主幹が、「部屋の川柳を見たかね」と声をかけられたので、内部へはいってみると、

**—戦国の忍者亡びつ黒で生き**

という軸が座敷に掛かっていた。

伊賀忍者屋敷で中島生々庵主幹と山川阿茶女史

（岸本氏撮影）

「俳句ではないでしょうが、これは川柳ですか」と、そばの人から聞かれたが、ちょっと返事にこまってしまった。

忍者屋敷の縁側で生々庵主幹と阿茶女史がカメラへポーズをされると、すかさず野迷路氏が一句ものされた。

**—これ一寸いけるぜと阿茶生々庵**　野迷路

×

上野温泉ヘルスセンターで昼食休憩後帰阪するのだが、出発予定の三時に、看護婦の恭子さん、富子さんに葉子さんら三人娘がバスへ帰ってこないので、小石夫人やカメラマン薬剤師の岸本さんがさがしに行かれるという一幕もあった。奈良市へはいって、ここでも二十分間の休憩があったが、こんどは可愛い中学生の坊ちゃんが時間内に帰ってこなかった。この坊ちゃんは故牟田一哲氏（元不朽洞会員）のお孫さんだった。

☆

十六世紀末、筒井定次について藤堂高虎が上野に城を築き、上野市が城下町としての形態をととのえ、荒木又右衛門伊賀越え仇討ちの遺跡など、今日の雅趣あるたたずまいとなったのであろう。

関西のスイスといわれる風光の地、俳聖を生んだ伊賀上野で、川柳医家は何をつかまれたか、それらを詠んだ佳句が次号あたりにあらわれることであろう。

か。売り払われてしまってから、マスコミや警察が大騒ぎするので、その重要さに気づいて今更のように、あわてるようでは困りものである。

◇法律的にはどうか知らんが、国宝や重要文化財は、寺や個人の私有物ではなかろう。

寺や個人は国家の国民の貴重な財産の、保管を委託されているという意識に徹底して、その保存管理に万全を期してもらいたいものである。と同時に文化財保護委員会としてもこれら宝物の保全について十分遺憾のない、環境を作ってやるべきであろう。

**重文の仏を祀る屋根が漏り**　柳志

# 選者の使命

直原七面山

どこの柳社でもまた大会でも、予め選者が決めてあって、投句された句の中から「これが立派な川柳なんです」と言って、入選句をそれぞれの方法で発表しているのでありますが、果してその選が、妥当であるかどうかについては私は多分に疑問を持っています。

つい先日も、私はある大柳社を主宰する選者が「○○君の句はどうも僕には良く判らないんだが……と言って、一句も抜かぬ訳にもゆかないしネー」と言っているのを聞きました。

さて、句を抜く方はともかくとして、これを川柳句として読まされる方はたまったものではありません。

また、この自己をいつわった選者の行為は川柳人として全く自殺行為だと言う外ありません。

その時私は年は取っていてもこの人は「選者の使命はなにか」ということについて、なんの知識も持ち合わせていないんだなと、心淋しく思いました。

そこで、この人の洩らした「よく判らないんだが……」の一言の中には、選者がその作家に対してなにかひけ目を感じていて恐れおののき、その作家に馬鹿にされはしないだろうか、この句の良さが理解出来ないのかと、作家が腹の中で笑いはしないだろうかというような考えから、自分にもよく判らない句を結局抜いてしまっているということを含んでいるように思われるのです。

さて選者たる者は、先ず第一に、全川柳人を、全読者を代表して、その句の選を任ねられているのだということを、この事実を夢にも忘れてはなりません。

この一事さえ忘れなければ、私はその権限を任ねた人々の欲する句が、その人々の待望し認め得ることの出来る立派な川柳作品が、その選者の目をとおして、そこに選び出されて来るに違いないと思うのです。

なぜなら、その選者がみんなの代表者であると自覚している限り、その川柳観はそれらの人々がそれぞれ抱いているであろうところの集約された川柳観であり、その句に対する価値観もまた、それらの人々の価値観に等しいから、最も正しくそして完全無欠な良選が出来るのです。

従って、そこにはもはや、選者個人の好みや個性や川柳観などさしはさむ余地は全然ありません。

が、もしも、選者がみなの代表であることを忘れたとすれば、その瞬間から選は自分本位となり、自分の好みの選を行ない、自分にのみ判って他の人には判らぬ句を抜いたり、或いはまた、他人にはどうにも理解し難いような妙な句を入選させてしまうような、そんな大罪を犯してしまうようなことになってしまいます。

さて、選をするということは、これは日頃自分が研究し、日頃自分が鍛えて来た川柳観を、川柳理論を事実をもって証明することの出来る好機なのであります。

従ってその選の結果が、持論と全く反対になってしまったのでは、その人が日頃どんなに高遠な川柳理論を展開しているとしても、それはただ一場の夢にすぎず、絵に画いた餅だといっても過言ではありません。

その良い例がここにありますので、その方に深くお詫びしながら、次に述べてみましょう。

ある選者がある川柳大会に招かれて柳話をし、その時こう申しました。

「自分の長い川柳生活の中には、とても数えることの出来ないようないろいろのことがありました。

そしていろいろの川柳上の悩みもありました。

一時革新川柳に走ったこともありましたが最近になってようやく川柳の本質をつかまえることが出来たように思います。

それはなにかといえば、結局川柳は三要素につきると言うことであります。

これが私の迷いに迷った揚句の果てに到達した世界なのです。

で、このことが判然りして来ました以上、私の今後の川柳活動の全てはこの一点にしぼられて参ります。

しかもその三要素の中でも、特に私はおか

しみの句に興味を抱くとともにこの上ない魅力を感じます。

私はこのおかしみの境地をどこまでも掘り下げ、どこどこまでも追求して、私に与えられた川柳人としての使命を果して行きたいと思っています」と。

ところがどうでしょう。それから一千日も経たないうちに、その柳人は、新聞川柳の選者として次のような句を抜いております。

（一、二、三、四席の順）

山の悲歌雲の交響楽おこる　草夢
農に徹す一片の雲笠にして　幾子
池の面で雲ゆっくりと化粧する　和治
御来光雲海に映え行者伏す　晃

一体この事実を皆さんはどうごらんになりどう理解なさることでしょう。言ってることとやってることが全くチグハグで、見方によっては正反対だとも言えましょう。

人々の中には、この選者を「節の無い人」とか「新らしがり屋」だとか「川柳がよく判っていないのではなかろうか」などと、けなしたり悪口を言う人があるかも知れませんが私は「この選者は選者の使命というものを全くご存知ないのだ」とこう申上げたいのです

即ち、選者としては余りにも独りよがりで心貧しいお人であり、己れを失ってていに生きている選者だと。

なぜなら、もしもこのような句が立派な川柳として柳界を活歩するようでは、これはもう川柳の発展に寄与するどころか、反対に、「川柳の末期的現象ではないか」と他に非難されても、一言半句返えす言葉が無いからであります。

しかも私は「おかしみの句に一生を捧げる」とまで言い切ったあの作家が、なぜこのような誤った選をしてしまったのか、それのみが気がかりでなりません。

さて川柳人たる者は、少くとも川柳発展の阻害になるような言動はこれを厳につつしみもしも選者として句の選を担当するような時あらば、選者として自己に課せられた使命の重大さと選の本質とをよく見極め弁えて、決して川柳でないものを川柳として大衆の前にさらけだすようなことの無いよう、充分の上にも充分気をつけたいものです。

# 野球と川柳

谷沢好祐

野球の審判員でも、高いストライクが好きな人、低いストライクが好きな人、インコースが好きな人、アウトコースが好きな人と、同じストライクをとるにも違いがある。我々のする草野球は時にひどい。投手たる者は早く主審の好きなコースを見付け、良くとってくれる所へ球を投げるように努めねばならない。そうしないと四球禍に苦しむのである。

川柳に於いても同じような事が言える。作家に各々個性があり、同じものを見ても又、感じても句に表わす方法が違う。所謂、句風と云うものである。何年も同一メンバーで句会をやっていると、如何に代筆して投句しても誰の作だとゆう事が大体わかる。例えば入選句を読み上げると、雅号を言う前に誰の句だなと判るから妙である。

ど真ん中のストライクはどんな球審でもストライクである。良い句は誰がみても良いと言う事は論を待たないが、こんな句は名句の類いであって少い。けれども、まあ抜けるか抜けないかの境界あたりの句であれば、球審風にマッチしたコースへ投げたもの、即ち選者の好きなコースへ投げたような句を出したなら、多く抜けることは疑い無しであろう。

選者としても、公平な立場に立って見ようと努力し、自己の句風を抑えて選をしようとするのである。併し選者によって天・地・人が入れ変り、没が平抜きになる事はあり得るのである。

だから選者がピンと来るような事、又は選者の句風を考えて投句すると良く抜けるものである。よく抜けるから面白くなる。こうなると励みが出る。その中に段々自分の句風を作って行くようにすれば良いと思うのである

# ・こちら報道部・

**中島生々庵主幹**

十一月十二日医師会の幹事会出席のため大山へ行かれたが、山陰の川柳家諸氏にお会いする時間のないことが残念、と。

**川上三太郎氏に褒章**

「川柳研究」主幹川上三太郎氏が紫綬褒章の栄に浴された。先生をお祝いする声が全国に満ちあふれている。

**川岡霊眼子　氏**

わが人生を試めしてみたいと、今年東京世田谷の国士舘大学にはいった長男（川岡俊晴20歳）が十月の試験終了の十月十日から、単身東京を自転車一台に身をたくしてわずか二千円の準備会で出発。

途中金がなくなると二日三日とアルバイトをしながら食費をかせぎ、小田原—熱海—伊豆—沼津—浜松—島田—名古屋—三重県鈴鹿峠—草津—京都—大阪—神戸—淡路島—鳴門—香川—愛媛—山口県柳井—下関—佐賀—長崎—雲仙—諫早と、寺に寝たり公民舘に眠ったり、民家の小屋を借りながら諫早の自宅へ十月二十九日午後四時に着きました。私にも無断でやりとげ両親をびっくりさせ、先生たちもびっくりし、新聞ダネとなって世間を驚かせました。

いまの世代の若者には老人もおどかされています。

**日本半分踏んだ童顔とも見えず　霊眼子**

**堺市の緑化運動**

堺市長提唱の「市民の森運動」を推進することになり、堺市ならびに堺市委員会募集の緑化標語の審査員として八木摩天郎氏も選をされ〝この一本やがて緑の堺市〟が一等になった。なお不二田一三夫氏の愛嬢も佳作に当選された。

今回〝市民の木〟を制定することになり、「柳」が市民の木に決定した。堺の川柳会が協賛して「柳」という題で作句、その選者にも摩天郎氏が指名された。

**—柳から見れば堺は広くなり**

**—ふる郷に柳ありけり刀鍛冶**

など堺市独特の句が生まれた。また府立堺工業高校の文化祭に短冊や色紙などを貸与し川柳と俳句のちがいなどの質問に答え、川柳を同校学生に鼓吹するなど、摩天郎氏は大活躍をされたのである。

**富柳会弘川寺吟行**

カットの写真説明。後列左から摩天郎・尚子・好郎・白柳・静馬・柳太・中列＝尻谷・美代・すみれ・花梢・柳志・静林庵・きはち・前列＝青米・紀子・吉太郎・金三（笑痴撮影）

**南大阪川柳会**

時　12月20日（火）六時
題　不思議・分別・悪友・マジック
所　アベノ松崎町　大萬

**玉造川柳会**

時　12月10日（土）夕
題　似合い・汁・割当て
所　玉造交差点南百米　大阪信用金庫

# 川柳の墓碑

清水白柳

近年は川柳の句碑を建てることが多くなって、一寸したブームの観があるのは誠に川柳界のために喜ばしいことである。ここに御紹介するのは句碑ではなくて、故人の自筆の句を、その墓石に彫って建てられた墓碑、こんな言葉があるのかどうか知らないが、その墓碑を御紹介したい。旧い川柳不朽洞会の会員なので、知って居られる方は少ないと思うが杉原大研子という柳人の墓碑なのである。大研子さんは昭和四年頃から川柳作句に入られて「大大阪」系の研究会で活躍して居られたのだが、昭和十五年当時の雑誌統合で、川柳不朽洞会に入会して、昭和二十五年八月三十一日、阪大病院で、心臓すい弱のため五十四才で逝去されるまで、不朽洞会員だった柳人である。

今年は十七回忌に当るので御子息の圭三、邦己、良昭さんが亡父大研子の郷里、広島県福山の正蔵坊にある杉原家墓地へその墓碑を建立されたのである。墓石は黒御影石で表は杉原氏、後へ故人の句を彫られた。それは

**一軒家　父祖伝来の土に生き**
**人生のさはさりながら思ふ日よ**

の二句であって故人の自筆である。句のことについて、小松園氏と私も御相談に預かったのだが、自筆の句があった事は何よりも故人のために、よろこばしいことで、私等としても心からおよろこび申上げたい。

昭和二十七年八月三十一日、大研子三回忌の際に私が出した思い出集「ひまわり」の中に「父大研子は、わたくし達子供にとって、こわいがよい父であった、幼い頃は、父というものは夜遅く帰って朝は遅くまで寝ているこわいものだと思っていた。中略しかし父には父でやはり子を思う心があったのである。今にして思えば、父は母より先に一度目を覚まし、母に子供達のために朝の仕度を促すのを習慣としているようであった。中略かくして父は現実を重んじつつ進歩を忘れず、その中に理想をもって、誠実に報恩感謝の気持で世に接し、子を愛しその将来を案じつつ、去ったのである。わたくし達はこのように解することが、亡き父に対する一つの法要と考えるのである」下略

そして最後の句であろうかと思われる、

**この世には未練はないが子を思い**

大研子という文章を圭三さんが書いて居られる。

川柳家としての父の墓石にその作品を刻むことを父への供養と思い、それを実行して下さった大研子御遺族の方に川柳家の一員として心からお礼を申上げて、共に故人の御冥福をお祈りする次第である。

合掌

**高須啞三味遺句集**

武蔵庵同人諸氏（編集人・藤島茶六氏）の協力で「高須啞三味遺句集」が出版された。故人の川柳二百句ほか名士が執筆—本社の薫風、すゝむ両氏も執筆参加。

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

# 錠　前

丸川初甫選

錠かける程の生活に　まだなれず　甦光
銭湯の錠前裸へもてあまし　白汀
口に錠おろせとお喋り叱られる　光郎
子の居ない呑気さいつも錠がおり　軒太楼
錠前も七つ道具に歯が立たず　繁太郎
同情の目を背に鍵っ子錠はずし　花子
釘一本錠前にして二階借　酔夢
温泉で浮気の錠をそとはずし　句楽坊
錠掛けてこれから二人だけの夜　どんたく
秋日和錠前だけが留守番し　松風
ブルドック錠前僕が引き受けた　雄声
錠前の音もつめたくひびく朝　みやこ
改心の過去へ錠前しかと掛け　秋月
嫉妬とは錠前かけるように言い　無聖
名人の手に錠前のあっけなさ　七面山
錠前がかけられたまま左前　晃男
錠前の方を息子より信じ　幽谷
大倉庫錠前もなく村平和　秀峰
寡婦きびし戸にも胸にも錠をかけ　千代
錠前に蜂の止っている静か　水客
道具箱明治の鍵が錆びたまま　杜的
錠前へ鍵っ子知ってる勝手口　清泉
錠前をはずしやっぱりいい我が家　芳子
錠前の錆も先代からの錆　魚山
錠前の鍵を電話で呼ぶ火の手　芳仙
錠前に頼る女の稼ぎの身　弥生
錠かけて来たかとくどい里の母　素身郎
錠前も錆びて無難な日が続き　十九平
錠前を切った手口で足がつき　藤波
錠前は胸にかけろと云うおやじ　太朗
錠前に留守を預けて妻と旅　礎山
錠前の安堵の裏にある隙間　旭峯

佳

錠かけるとは水臭いことをする　琴女
錠前もここまでくれば美術品　古方
錠前に落ち目の家と知らされる　水客
安心感買う気で錠前高う買い　恵二朗
錠前のいらぬ秘境で一人老い　句楽坊

人

錠前の運命は鍵につきそわれ　凡九郎

地

錠前へ夕日はじいてつつがなし　千翁

天

秘仏公開錠前の音も古り　水客

軸

錠前ものれんも先代からのもの

路郎川柳手拭い
子沢山僕のまくらは何処へいた
定価　百円
送料　二十五円

# グッドバイ

野田素身郎選

グッドバイ家裁他人の顔で出る　酔夢
乳に顔埋めた片手がバイバイし　軒太楼
言葉には出さず目と目グッドバイ　白汀
グッドバイ大ものらしい札を切り　清泉
バイバイの孫につられて手をあげる　愛鳩
何かまだ云い足りぬままグッドバイ　愛鳩
グッドバイ二度と来ぬ気の出所の日　秋月
こんどこそほんまに別れるグッドバイ　どんたく
グッドバイへ外人にんまりさようなら　句楽坊
投げキッスするさようなら子がおぼえ　芙己代
グッドバイ男の意地が振り向かず　宗太郎
あれだけの恋も電話でグッドバイ　木魚
グッドバイ妻が実家にまた帰り　保夫
グッドバイの声も吸いとる発車ベル　千代
グッドバイ子供に馬鹿にされたよう　金三

割勘の恋はあっさりグッドバイ　弥生
また何時も曲り角なりグッドバイ　弥生
グッドバイ交わしも一度キスされる　芳仙
怒って帰る客にも坊やグッドバイ　いさ夢
グッドバイ屋台の犬にまでもする　宵明
グッドバイ云うて婆さんはいって来　幽谷
見習うてグッドバイには手を握り　湖平
グッドバイやからエロ雑誌をひろげ　七面山
懐中電燈まだ廻してるグッドバイ　章雅
グッドバイの声ねむそうな夜学生　すき
グッドバイ三つの子供に握手され　すき
グッドバイサンキューだけで洋行し　亭
勘定もせずグッドバイグッドバイ　太朗
グッドバイ馴染の店でまた出合い　太朗
バイバイはチップの効いた送りよう　露声
グッドバイ尾灯追う目がふとすみ　恵二朗
グッドバイ共に右手が上っとり　利晴
グッドバイママの後で声がする　利晴

佳

抜目なく手を握ってるグッドバイ　千翁
心からグッドバイ胃癌の手術前　野迷路
サヨナラをしても指切りまだ解けず　不水
グッドバイあとは一人で飲むコース　不二
グッドバイしてしばらくは星をひろ　たつみ

人

マダムに振られその飼犬にグッドバイ　十九平

地

あした又会う倖せなグッドバイ　愛鳩

天

はじめからその気でしたとグッドバイ　清人

## 忘れる

中村　九呂平　選

アルバムに忘れられてる恋があり　初甫
緊張にセリフ忘れた子の舞台　芳子
忘れもの年の精では済まされず　代仕男
忘れ物無事に戻った投書欄　杜的
ふるさを忘れるまでに成り下がり　繁太郎
お忘れでしょうがとほくろ指され　千翁
忘れるという幸福があり楽し　野迷路
人間に忘れると云う美徳あり　紫
忘れ物先に届いて嘘がばれ　正朗
運悪く妻にとどいた忘れ物　素身郎
地に這わんばかりに借りたこと忘れ　愛鳩
あの人を忘れる為の故郷を捨て　佳女
忘れよう心が夜を眠らせず　宵明
もの忘れする日もあってふと佗し　酔夢
忘れたい顔が浮んだ猪口を置き　旭峯
物忘れいいよと自分で不貞腐れ　睦夫
忘れものそのままかえって来た善意　清泉
忘れものすればお年をひやかされ　文子
約束をどっちも忘れていた笑い　清人
あんのじょう傘を忘れて来た酒場　どんたく
お忘れでしょうがと恩を返えしに　奇童
忘れてた人から届く季節もの　たつみ
忘れもの取りに来てまた話し込み　秋月
忘れてる顔へ合槌うっておき　清泉
忘れ得ぬ女残して左遷の地　七面山
忘れないという慰めにあきたらず　古方
似た人へ忘れた昔思い出し　弥生
忘れてる筈がないのにそっぽ向き　千夏
火をつけて忘れてくれと薄情な　慶之助
ど忘れの名が出ず障りなく茶化し　不水
そんなこと忘れてしまえとは他人　奇童
何もかも忘れることにして別れ　光道

佳

世話好きの男に貸しを忘れられ　旭峯
忘れるといい切る声にある未練　千代
虫のよい話忘れてくれと云う　七面山
今更に名前きかれぬまま話し　英子
よしよしと安うけあいが忘れてる　いさ夢

人

男なら忘れろと云う第三者　鎮也

地

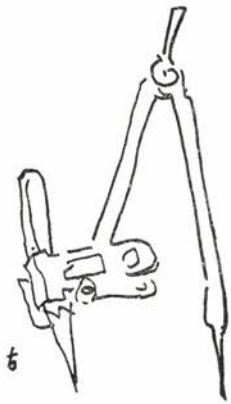
忘れたい人が野菊にふと浮かぶ　野迷路

天

一生涯忘れませんとそれっきり　琴女

# 初歩教室

題　「弱点」



菊沢小松園

先ず題の弱点であるが、川柳する目的の一つに、句を通じての人間性の追窮がある。随って、この場合も人間の弱点が大部分であることに、間違いはない。それは性格の弱点もあろうし、行為の弱点もあろう。先天的な弱点もあれば、後天的な弱点、相手と自分の弱点、色々と画き出される世界ほ、実に千差万別である。さて

**上役の弱点握ってる強み**　亜也
**敵もさるもの弱いとこついて来る**　同
**弱点をだまってカバーするも妻**　千代
**弱点も金であっさりかたがつき**　同
**弱点があって話題に気を配り**　千代

第一句、上役の弱点に非情さを見る。あり得ることであっても、あまり感心したことではない。第二句、これほ自分の側の弱点である、この句の生々しさに感心する。第三句、この句に女性の句らしい暖かさを知ることが出来る。第四句、弱点の終末篇であり、又不行届の解結版でもある。第五句、この人間味はうれしい、佳句である。但し助詞に気をつけること、素材の扱い方に失敗した例。

**鼻筋へ白を濃いめに化粧する**　C
**弱点を掴んでからの妻強気**　C
**人情に弱く部下には親しまれ**　C
**弱点を握って腐れ縁つづき**　C
**弱点へ鏡はうそがいい切れず**　芙巳代
**欠点を世辞が個性というてくれ**　同
**弱点を突かれ喧嘩ははでになり**　花子
**三十年添うて弱点苦にならず**　同

第一句、同じ素材でもこうも生きて来る。凝人法で成功した。第二句、人間関係の上で世辞に対する作者の眼が光っている。第三句人間の弱さに触れた句、下五の露骨さに難。第五句、夫婦愛の純情さが滲み出ている。

**弱点に触れそう話題かえてやり**　要次
**弱点がどっちもあって睦じく**　同
**弱点を泣きどころにして票稼ぎ**　弘生
**弱点をもって左遷の駅へ降り**　文平
**弱点をつつかず一本つけて出し**　すき
**弱点を妻にしゃべれる年になり**　同

第一句、年配の人の気の配り方行き届いた述法、殊に中七で余韻が出来た。佳句。第二句、これはやや説明が勝って落ちる。第三句句意ほ判るが、素材に難色、下五に一考の余地あり。第四句、弱点もここへ来ると肌寒さを感じる。深刻味がよく出ている。第五句、明るいユーモアのある句で佳い、女であってこそ出来る句である。第六句、経験から出来た句、この人の総体に云えることほ、やや楽に創り過ぎていることです。もっと練るとよい句が生れましょうに。

**弱点も愛嬌の一つと笑われる**　初甫
**弱点を云う方も弱点持っている**　H寿美司
**自分にも弱点があり黙認し**
**弱点をあばいたメモで金儲け**　M正義
**後味の悪さ弱点つつき過ぎ**　千夏
**運転手社長の弱点のみ込んで**　竜泉
**弱点をかばい合ってる共稼ぎ**

第一句、弱点という語感から来る重苦しさから離れて、こうした軽い意味の弱点もあると教えているような句になって面白い。第二句、これほ理屈であって作者の影さえ窺えない。批判や感じが、顔を出さねば全く、無意味な報告に過ぎない。第三句、御互い様と云ったところを、よく掴んでいるが下五の、生硬さに引っかかる。何とかよい語句をと思ったが果し得なかった。

**弱点にじわじわ触れて着物にし**　痴亭
**弱点を突いてる方が平社員**　保夫
**弱点があって人間らしくなり**　白汀

弱点をそのまま個性として生かし　瑞枝
恋すすむ互いに弱点見えぬまま　芳子
恋さめてほくろはほくろにしか見えず　徹也

第一句、これほど夫婦ではない女性に心許した結果の弱味か、取材の面白さで句が生く。第二句、突かれている方が、上役だから面白くなった。第三句、完全無欠では近寄りにくい、弱点があって、人間らしいと見たところ川柳になっている。完全な人格は人間の昇天であって、もはや神である。切りの見えよりこの場合はなりにした。第四句、弱点を好意的に見たのである。第五句、恋は盲目の川柳版、惚れて通えばあばたもえくぼか。第六句恋は熱病、醒めればこうしたものか、但し黒子のある場所にもよる。

弱点をカバーし合ってるいい夫婦　正朗
弱点を衝いて濁流遠慮せず　清泉
弱点を握られているおとなしさ　みやこ
弱点を衝かれ弁解汗をかき　軒太楼
アキレスも足の弱点見破れ　句楽坊
かぶりつく種子なし西瓜のたよりなく　静観堂

第一句、麗しい夫婦愛、御互いの弱点がかえって愛情の紐帯となる、ほほえましい明るい情景。第二句、この弱点は、一見自然の弱点のように見えるけれども、決してそれで人間との関係が薄い句とは限らない、護岸や、提防工事に、手ぬかりがあれば明かに人災になる。句主もそこを突いたのだ。近頃の世相に一矢をむくいたのだろう。第三句、この句の下五が殊によく利いている。弱点を握った例からの句は多いが、握られている側の句は少ない、動きのとれないのを、故意におとなしさと、云い切って句格が上った。第四句、弁解に汗は云い古されて損、常套手段で迫力がない一考のこと、第五句、足の弱点を見つけられて句にされたことに感心、新しい句境を試みられる熱心を感心しています。苦吟してこそやがて本当の句が出来ましょう。第六句、ただ種なし西瓜を持って来られた見つけ所の面白さだけの句、下五が説明におわっておしい。

弱点を衝かれて帰る下駄の音　破天
御互いに弱点があり譲りあい　同
弱点と決めずに御人がよいと媚び　百酒
酒のんで女の弱点つついてみ　比呂路

第一句、尻尾をつかまれて突っ込まれて帰ってゆく下五で生きた句、その音が心細く消えて行ったか、荒々しく去って行ったかは知らぬが、残って行く後ろ姿も想像されて面白い。第二句、この句のようにゆけば社会も静かになる、和を以て貴しとす。第三句、直言せずに媚びている背後にあるものを想像する金か色か、世はさまざま。第四句、この句は浅いただそれだけ、もっと句に深味がほしいました。手許の原句と参照して見て下さい。

弱点を握られこずき回される　選者吟

総体に云えることほ題意の説明に句の大部分を割かれているのが目立ちます。説明に重点を置かずに、そこに現実の動作を入れるとか感じを入れるとかして作句者の顔や頭を句の上へ現わして下さい。現実の描写を通じて句主の感じを活写出来れば、自然に題意を経ての社会批判も生まれましょう。いわゆるパンチの利く句もその上のことです。選者を驚かすような句を御見せ下さい。

四十二年一月二十日締切　三月号発表題
題　「顔」マスク　五句以内
宛先　大阪市阿倍野区王子町二番二二号
菊沢小松園

弱点を受けて立つ気の咳払い　徹也
泣き事へうかうかはまり買される　一扇
弱点に触れずそのまま配置変え　紫

右の四句、作意に触れずに、小々手を入れ

★

新同人紹介

永松道雄

生々庵—一三天推薦

第百八十七回（新年度第十五回目）

大萬川柳

# 「片思い」

選者　清水白柳
投句総数　七百十三句
入選　八十五句

入選発表

八幡浜　すき
すれ違うだけでときめく片思い　鳥根正朗
片思いむかし話に出来る齢　熊本芳仙
片思い四五日会わぬ胸さわぎ　大阪弓彦
ふだん着で子守りをしてた片思い　米子瑞枝
残酷なのろけを聞いた片思い　笠岡要次
嫁がれて重荷のおりた片思い　西宮千夏
逃げだしてまたのぞいてる片思い　大阪雄峯
トランプへ溜息きついた片思い　大阪寿美司
片思いくよくよするなと陽が昇り　丸亀ゆずらん
アルバムはまだミスのまま片思い　岡山一声
親友へしみじみ語る片思い

大阪　水客
片恋の人に握手でおくられる　大阪金三
妹に言われはにかむ片思い　岡山七面山
片思いのまま還暦を叔母迎え　山口弘道
ブロマイド部屋中貼って片思い　鳥取礎山
恋しさを詩に耐えている片思い　大阪琴女
イニシャルを書いは消した片思い　玉島旭峯
片思いこころ静かに口ごもる　岡山十九平
片思い見ている方が腹が立ち　大阪保夫
惚れはるのは勝手好きなは唯一人　加賀光郎
プレゼントばかりしている片思い　笠岡忠三
通勤を五分早めた片思い

大阪　集一
うつむいてすれ違うのも片思い　堺慶之助
正直に好きと言ったら笑らわれて　大阪阿茶
罪のうてええやないのと片思い　布施清人
世話好きの知恵借りに行く片思い　大阪春巣
片思い酒が飲めたらなと思い　富田林美房
九千万いるのに一人恋いとがれ　和歌山木魚
いらんものまた買うてくる片思い　西宮多久志
片思い阿呆なやっちゃと第三者　高石好郎
花婿を一と目見てくる片思い　高槻静馬
第二候補のあてもしてある片思い　米子千代
明し得ぬ慕情へ発車ベルが鳴り
ハネムーン送りひとりの恋終る　大阪凡九郎
日記帳もう忘れてた片思い
片思いの過去なつかしむ倦怠期　南河内吸江
生きてればもう六十か片思い
堂々と自叙伝に書く片思い　香川酔夢
片思い母が乗り出すひとりっ子
片思い養老院で打ち明ける　倉吉素身郎
片恋にふんぎりがつく辞令が出
片思い出さぬ手紙を今日も書き　児島恵二朗

片思いおみくじおそるおそる引き
初恋は破れ第二は片思い　富田林東雲楼
教え子に所詮は夢の片思い
片思い見える角度に乗る電車　石川宗太郎
再会の悲劇どちらも片思い
好きなのは僕でなかった片思い　大阪小松園
暇乞いやっぱり惚れてはったのか
恋すればこうも内気な置手紙　大阪梅里
片思いなんでもない娘にひやかされ
ほろにがい想い出ばかりのこる恋　芦屋たつみ
妻子ある人へどうにもならぬ思慕
片思いきれい想い出だけのこり


営業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
蒲生店
十三店
九条店
買いよい
良い安い
crcdit system
月賦百貨店
丸越
本社　大阪市阿倍野区帝塚山東1の6
電話—623—1151～3

その人が居ておちつけぬ片思い　大阪　没食子

片思い職場をかえる肚を決め
俳せないま片恋の人想う
詩に歌に匂わせている片思い　奈良　十悟

片思いそれでいいのさ富士の嶺
おふとんへもぐって寝てる片思い
猫に愚痴聞いてもらてる片思い　堺　一舟

片思い今なら話す地位も出来
あわび食うたび思い出す片想い
神様のほかは知らない片思い　大阪　弘生

イメージで育てた像に片思い
日記帳今日も会えたと片思い
会うための遅刻もしてる片思い　大阪　文秋

あんさんは好きでもなくは嫌いどす
油揚げさらわれたような恋だった
片思いでもよし好きなひとは好き　岸和田　きさ子

さりげなく綽名を呼んで片思い
片思いだけでたのしい日々を持ち
片思いさせて剃りあと憎くらしい　鳥根　代仕男

横顔へ視線を盗む片思い
さげすまれそうで思いを切り出せず
片思いまだ空想の境を出ず
片思い声かけられただけでてれ　五客　名古屋　千久良

片思い夢でははっきり言えたのに　米子　花子

片思い秘めて一と口乗る祝　石川　宗太郎

じれったい眼で片恋いの背をうっき　高石　好郎

片思い妹の方に好かれかけ　高槻　静馬

片思いに泣いたひとの名娘につる　人ノ句　篠山　可住

年賀状だけ続いてる片思い　地ノ句　鳥取　礎山

片思いだった人の子抱いて見る　天ノ句　富田林　美房

洗濯をそっとしといてあげた恋　選者吟

片恋のノートの端を捨て切れず

一五　一四　一三　一二　一一　一〇　九　八　七　六　五　四　三　二　一

没食子　可住　清人　宗太郎　恵二朗　阿茶　文秋　静馬　好郎　きさ子　吸江　美房　柳志　梅里　水客

## 大萬川柳ベストテン

（十一月現在）

一九、五　篠山　大阪
一九、五　布施
一九、五　石川
二〇、五　児島
二二、五　大阪
二三、五　大阪
二三、五　高槻
二五、五　高石
二六、〇　岸和田
二六、五　南河内
二六、五　富田林
二八、〇　大阪
三五、五　大阪
三六、五　大阪

一六　痴亭　一九、〇　大阪
一七　木魚　一七、〇　和歌山
一八　春巣　一七、〇　大阪
一九　十九平　一六、五　岡山
二〇　一舟　一六、〇　堺　以下略

昭和四十一年度最終回
次ぎの兼題締切
発表　十二月二十五日
一月二十日

新年度　第一回
兼題「長靴」五句以内
締切　一月二十五日
発表　二月二十日
投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇
大萬川柳会

## ・本社常任理事会・

十一月四日午後六時から第十回常任理事会が本社で開かれた。

まず大阪文化祭川柳大会の打ちあわせをした。ことしは「川柳文学」と「川柳塔」の当番である。本誌の倍加運動は生々庵主幹がその委員長になり、常任理事諸氏が委員となって、いよいよ本格的に活動することになった（誌代など値上げせずにどこまでやれるか、同人諸氏もよろしくご協力たまわるようお願いいたします。）

出席―白柳、梅里、形水、古方、小松園、生々庵、栞、文秋、好郎、一三夫諸氏。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

# ☆柳界展望☆

写真説明・伊賀上野へ南区医師会の秋のレクリエーション・左から葉子・阿茶・小石・野迷路・故一哲氏令息・田実・一三夫・生々庵諸氏（岸本氏撮影）

橘高薫風担当

▼中島生々庵主幹は10月30日、南区医師会々長として恒例の秋季レクに三台のバスを引率され、芭蕉生誕の地、伊賀上野へ行かれた。

▼若本多久志氏（西宮市）は熊本で開かれたライオンズクラブ大会に出席、天草五橋めぐりや、大小百二十余島に旅情をたのしまれた。島かげに天草五橋見えかくれ—多久志。

▼戸田古方氏（豊中市）は大阪文化祭川柳大会に講演の作家秋田実先生とは大高時代のクラスメートなので久しぶりに会われた。

▼山田季賛氏（高槻市）は新大阪線引上線工事竣工。くろよんダムを見学された。—くろよんの空気を賞めダムを賞め—季賛。

▼清水一保氏（鳥取市）が主催者となって11月3日東伯町文化祭記念川柳大会を開催、NHKや山陰テレビなどに報道され盛会だった。町長賞に八木千代、議長賞には住田三鈷、教育長賞に森田布堂、読売新聞社賞に林瑞枝、八木千代のみなさんが入賞された。

▼本田恵二朗氏（児島市）が所属するライオンズクラブの機関誌に川柳講座を執筆。最近は八名ばかりの川柳愛好者が生まれたことをよろこんでおられる。

▼備前川柳社では交通事故と踏切事故防止に役立てようと昨年から事故防止川柳を作句、その百句程の中から数十句を選んで、町当局の応援を得て、標柱三十一本を作製、交通の要所、踏切などに建てたが、ペンキ塗り、句の記載などすべて川柳人の手で完成された。「青になるまでのこころにあるゆとり」「スピードを落とせ一人の道じゃない」「汽車は来るものと踏切見て通り」などの句が交通事故防止に一役を買っている

▼富柳会（富田林市）の吟行は十月二十三日河内弘川寺へ。

▼川上三太郎氏の町名番地が東京都中野区東中野一ノ三九ノ五と変更になった。

▼不二田一三夫氏（大阪市）の新作漫才が十一月九日午後七時半からNHK第一放送上方寄席で放送された。夢路いとし喜味こいしのコンビになる熱演を多数の川柳人が楽しく鑑賞した。

▼渡辺暁童氏（愛媛県）は九月二十五日から五日間教育研究会の研修旅行に別府天草五橋、長崎、日南海岸と案内役を勤められた。一人で初めての土地に旅したいのですがままになりませんと羨やましいお便り。

▼若柳潮花氏（高槻市）は十一月三日の岸和田川柳大会の選の出来るまでの間に若柳流の名取舞い長唄の「芽吹き柳」を披露好評を拍された。

▼清水冬眠子氏（小樽市）は十月二十七日他界された小樽川柳社の主宰、北海道川柳連盟会長として活躍され、北海道新聞柳壇選者ラジオ放送などを通じて道柳界の発展に多大の尽力をされていた。謹んで哀悼申し上げる。

▼宇和川木耳氏（布施市）は十月八日幼稚園児達と一緒に栗拾いに北摂へ。木になっているのではなくバラ撒いたのを拾う都会の子の悲しきが身に泌みました。

▼清水白柳氏（大阪府）の末の愛嬢が十月十六日結婚された。結婚式の準備と各

はげぬ・かぶれぬ白髪染
男まえ理容
環状線寺田町裏駅南一丁

地の川柳大会との板ばさみで多忙を極めておられる。

▼西尾義一氏（和歌山市）から路郎先生の句「すべりんこ親は涼しいとこで待ち」の書の風炉先のある茶室で抹茶を頂戴しましたがなつかしく師を想い起しました。「風炉光に路郎師の書あり茶を賜う」

▼羽原静歩氏（守口市）は来年三月五日に開館予定の守口市民会館で「川柳三十石」の句会を再発足させる準備を進めておられる一方各地の柳会柳人の句報句集を極力蒐集して、句の集大成を編纂出版する企画を進めておられる。連絡は大阪府守口市北寺方六一八寺方幼稚園内羽原静歩宛へ。

▼小野田川柳同好会（宇部市）は八月で一周年を迎えたので、これを記念して会の愛称を「世面多留」と呼称することにした。また文化の日に川柳展示会を公民館階上で、近郷川柳大会を高千帆公民館で開催した。

▼竹本素空氏は小野田川柳会の会長をしておられるが山口県川柳大会で入賞の栄を獲得された。

▼国弘半休氏（下関市）は八月十一日還暦を迎えられたので記念として近く句集の出版を予定しておられる。また庭の桐の木が大きく成長したので、これで手製の短冊掛を製作、同好の士に寄贈を思い立ち、すでに五本を進呈したが、桐の木のある限り続けるつもりである由。

▼第十三回国鉄岡山地区倶楽部文化部川柳大会は十月十五日国鉄クラブで。

▼河相すゝむ氏（西宮市）は十月八日上京、三周忌の近づいた高須皤三味氏の霊を慰め、次いで鬼怒川温泉での学会グループ懇親会に出席、一泊清遊された。

交譚安全柳杜をたてる諸氏
左から久米雄、一声。芦月、正洲

▼室井八九寸氏（京都市）の奥さんが八月三十日夜急逝されたことが氏からのおたよりでわかった。喜寿と古稀とで五十年の金婚をお子さんらから祝ってもらってまもなくのご不幸らしく謹悼。

▼堀江正朗、芳子さん（島根県）のご夫婦がそろって秋の奉納川柳に秀句となり末次神社にそれぞれ奉納された。

▼堀井勉、克子さん（横浜市）ご夫婦の句集「今日を生きる」が出版された。早川右近、中野懐窓両氏の序文。—天も地も笑って果立つ子を送り—勉。しあわせと聞かれて笑い返すのみ—克子。発行所、横浜市金沢区六浦町三七八二、川柳雑吟社。定価五百円。

▼永田六竜子氏（大阪市）は愚妻と一緒に憩うていますと、和歌山の大織白浜荘から旅信があった。—温泉に浸り銀婚過去をふり返える—六竜子

▼不二田一三夫氏は11月12日秋田実先生ほか漫才作家くらぶの方々と、亀岡市湯の花温泉へ一泊二日の秋のレクへ参加、ぼたん鍋に舌つづみを打たれた。

▼西田柳宏子氏（大阪市）11月は6日、13日、23日に尺八の演奏会がファミリーホール、朝日生命ホール、サンケイホールと三つひかえ大多忙とのこと。

▼真鍋一瓢氏（大阪市）11月1日自宅で胃ガンのため死去された。享年56歳、元不朽洞会員で好作家として鳴らした人である。合掌。

▼橘高薫風は十月十七日高松市の北条令子さんと、十一月五日新津市の大野風太郎氏と、それぞれ来阪中の余暇に初対面、同じ世代の川柳人の温い肌に触れて大いに感銘した。

## ・新同人紹介・

岡本昭三

—舟遊・すゝむ推薦

# 本社 十一月句会

会場　自安寺
五日　午後六時

文化の月―各地で文化祭川柳大会が開かれている。菊花かおるこの日、各地からの投句が急増して兼題選者は汗だくのうれしい悲鳴である。

多久志氏の柳話は最近の流行語のハンランから正しい言葉が乱れていることをつかれ、川柳家は言葉の使い方に注意するようさけばれた。兼・席七題のうち六題までの天位は選者級だったが、期待の新人作家芙己代さんが小松園氏選で天位をとり万丈の気をはかれたのはさすがであった。

（河井庸佑整理）

出席―一三夫・金三・古方・八郎・鉄舟・一舟・一栄・白溪子・滋雀・弘子・静馬・柳宏子・美房・いさむ・判志・花宵・公江・甘草・葛城・静歩・芙己代・弓彦・双楽・たつみ・貞山・白柳・好郎・痴亭・梅里・生々庵・文秋・吸江・形水・一扇・千梢・清人・〆女・孚彦・舟遊・集一・多久志・雄峯・句楽坊・有子・季賛・小松園・弥生・あいき・すゝむ・薫風・葉子

## 席題「バーベキュー」　本多清人選

白い胸あそ可愛いパパのバーベキュー　生々庵
バーベキュー味覚の秋にしてくれる　たつみ
焼けるまで待ってりゃたなるバーベキュー　一三夫
恋語る食べものでなしバーベキュー　小松園
バーベキュコップのビールが温くなり　いさむ
バーベキュー一人前で足らぬ肉　形水
隣から風が匂わすバーベキュー　滋雀
バーベキューの匂いハイカーの鼻へくる　文秋
バーベキュー滋養の足りた口を拭き　白溪子
バーベキュー散歩の犬も立ち止り　吸江
バーベキュー馬とは知らず舌づつみ　痴亭
バーベキューすき焼鍋もかり出され　吸江
バーベキュー祖母はこゝも奥の間へ　弓彦
バーベキュー姑のきげんとりそこね　千梢
バーベキュー話の種に食べる祖母　金三
バーベキュー持ち寄りで来る山の家　梅里
バーベキュー生駒山上の灯が近い　形水
バーベキュー皆ワアワアとにわか雨　多久志
舌づつみ打つて野外のバーベキュー　双楽
砂かけて消して帰ったバーベキュー　小松園
バーベキュー囲むワイワイ夜は更ける　弓彦
黒煙濛々パパ自慢のバーベキュー　生々庵
バーベキュー派手に回した換気扇　雄峯
バーベキュー香い団地を馳けめぐり　好郎
バーベキューキャンプの味もこれに尽き　多久志
料理教室ほどにはゆかぬバーベキュー　吸江
ピーマンと玉ねぎ場をとるバーベキュー　柳宏子
若い声谷間にはしやぐバーベキュー　一三夫
一坪へ犬も芸してバーベキュー　花宵
油あかあかバーベキューへ星が降る　古方
バーベキュー庭園灯の好いムード　清人

## 席題「総理大臣」　傍島静馬選

過半数総理の顔は日本晴　いさむ
今ごろになって吉田さんほめたたえ　一三夫
首相もう寛容調和というとれず　好郎
どたんばの総理強気の語をまげず　白溪子
税務署も総理へ甘いさじ加減　静歩
派閥には総理もままにならぬらし　弓彦
佐藤さんのらりくらりの手もつまり　好郎
がらくたが出て来て総理あわて出し　文秋
とり代えとり代え総理の襟が又崩れ　生々庵
申告は俺とチョボチョボ総理大臣　白柳
総理大臣をクン付けで呼ぶ漫才師　梅里
ワンマンの総理が欲しいなと思う　柳宏子
くさいものにふたして総理まだ強気　清人
芯のない襟を正すに困っとり　多久志
八方美人すぎる総理で頼りなし　舟遊
答弁にならぬ答弁する総理　吸江
又かいなと総理大臣にがい顔　多久志
小学生総理にズバリ質問し　芙己代
総理大臣へ直訴をしたい台所　一栄
母ちゃんが総理大臣で家が建ち　〆女
釜ケ崎総理はだれでもよい暮し　弓彦
団十郎などと総理もその気なり　一三夫
あれからの総理質素な郷土入り　梅里
滅私奉公総理大臣だけ一人　生々庵
孫の手を引いた総理はただの人　多久志
総理よりこども菓子屋になりたがり　静馬

## 席題「文化」　戸田古方選

張りぼての家も文化と思うて建て　一舟
女みな坊主枕で寝る文化　句楽坊
文化住宅薄っぺらな児に育て　生々庵
文化の日猫に秋刀魚をとられけり　孚彦
文化住宅つまりは二階借りのこと　痴亭
文化の日菊の造花がよく売れる　清人
山けずり田畑を埋めてゆく文化　清人
文化アパート裏の溝では蚊が育ち　いさむ
文化祭軽視出来ない子の作品　一栄
文化の日代理で済ませぬ会が待ち　白溪子
橋下の小屋で文化の秋といる　一三夫
金のない人に文化は遠いもの　生々庵
年寄にならねば呉れぬ文化章　静馬
文化祭明治の頃によく似て来　貞山

ビニールのような文化に落胆し　双楽
文化には遠く明日も土起こす　多久志
文化にはかかわりのない職で無事　たつみ
聞き込みを続け文化の日が終わり　白溪子
住宅も文化といえば弱々し　白柳
世にすねて居て文化の世話になり　千梢
ちょろちょろと文化は釜ケ崎に入り　弓彦
文化的くらしの中によろめきも　痴亭
名目は文化交流にして出かけ　弓彦
文化文化祖先のよさを見失い　生々庵
野の仏文化に遠く忘れられ　白溪子
文化の日母虫干に余念なし　静馬
ゆとりある心に文化の日がうれし　古方

## 兼題「略式」　河相すゝむ選

略式というても罰金放っとけず　章雅
略式の方が好かれる三部経　磯山
略式のお見合いでしたとのり気　野迷路
略式で行こう節約とは言わず　芳子
略式のあとは豪華な披露宴　正朗
略式で結ばれ金婚まで祝い　どんたく
大安の禰宜略式で相勤め　梅里
略式でやれと若さの野次が飛び　生々庵
略式というお招きの派手なこと　滋雀
再婚へ形ばかりの式を挙げ　双楽
略式も一線越えて礼をかき　いさむ
略式で通る時代のスピード化　たつみ
略式へ田舎の母がほっとする　形水
略式という気くばりを喜ばれ　孚彦
略式を嫌えばめんどくさがられ　雄峯
略式が親類中の気に入らず　形水
略式にしてもネクタイだけは替え　文秋
モーニング借るのをやめて背広で　金三
公民館でテープレコーダーの式を挙げ　梅里
奏楽もテープで流す華燭の典　吸江
お茶とお菓子の結婚披露もあり　一扇
平服でよしパーティの案内状　〆女
略式と言うて荷飾り見てもらい　柳宏子
万事略式でンネと式は呼ばない気　誓二
略式の礼服で葬儀屋は立ちまわり　芙己代
略式にしたシステムへ手がかかり　古方
インスタントやっぱりどこか抜けている　八郎
略式を荘厳と言う名に支えられ　小松園
略式でも折目正しき氏育ち　滋雀
水引の軽さ神詞も短こなり　芙己代
略式にする洋食へ箸を借り　生々庵
略式にしてもスカート短かすぎ　静歩
略式というう罰金の長い列　美房
略式ですます二人に押し切られ　生々庵
水引きもかけぬ中味がありがたし　弥生
略式で済ます門出の愛たしか　静馬
略式にしてもおんなは手がかかり　梅里
略式に嘆く古老の座りだこ　すゝむ
ほっとして略式何やら物足らず　菊田いさむ選

## 兼題「宿直」

宿直で足腰伸ばして倦怠期　八郎
独り寝の味しみじみと宿直日　多久志
宿直のパパへおやすみ言うしつけ　清人
ガス栓もしめて宿直の夜となり　生々庵
宿直で解いたクイズが当選し　一三夫
宿直を信じる妻の瞳澄み　集一
宿直の無聊へ教え子来てはしゃぎ　金三
読みかけの本持って出る宿直日　静馬
新婚へもう宿直が回って来　文秋
宿直にしとく麻雀付きはじめ　芙己代
宿直だから遊びに来いという電話　小松園
宿直へ差入れがある夜のたのし　白柳
宿直医急患の電話に起こされる　誓二
宿直へ碁敵ついに夜を明かし　清泉
泥棒を煎じつめれば宿直員　鉄舟
宿直へ記者が真相聞きに寄り　白溪子
宿直の代務代務まだ一人者　弘子
宿直の夜更へなべやき届けられ　一栄
宿直はやっときますと新入社　好郎
宿直も息抜きになる子沢山　すゝむ
年末へ若手宿直に狩り出され　柳宏子
宿直が金庫破りの夢で覚め　多久志
年末の宿直プレミアつけている　判志
アリバイ成る宿直だった筈のパパ　生々庵
誰れぞ宿直かわったろかと倦怠期　一三夫
宿直の手柄隣はボヤですみ　千梢
宿直へ今生まれたと言う電話　どんたく
スリッパにはきかえ宿直茶をすす　白溪子
ひとり者宿直代千円買うて出る　一三夫
宿直を縛る手口もおなじホシ　梅里
予定日の宿直妻に念を押し　清人
熱の子を案じ宿直夜もすがら　葛城
宿直の夜ご無沙汰詫びる二三本　多久志
指繰れば宿直になる大晦日　清人
宿直は無事故朝の陽がまぶし　いさむ

## 兼題「ストップ」　清水白柳選

こげついた匂いお喋りストップし　正朗
もう少しほしい身長ストップし　芳子
急停車しても客へは謝らず　金三
ストップのきかん若さをうれしがり　古方
晩酌へ血圧という赤信号　芙己代
パパのお帰りママのおしゃべりがとまり　あいき
千鳥足もストップしてる赤信号　一栄
ストップのかからぬ同士飲み歩き　たつみ
ストップで女の膝に手がさわり　多久志
ストップせよとレントゲンに言われ　集一
人影へストップさせる立ち話　弥生
週刊紙発売禁止で読者ふえ　一三夫
ストップをかけた方を揉めている　小松園
足止めをされてよかった通り雨　梅里
せっかちな足ストップへ胸を張り　静歩

酒癖へマダムストップ目で知らせ　吸江
ストップのきかぬ男で酔いつぶれ　梅里
ストップの工事へ秋草ようしゃせず　舟遊
拍手したのに社長まだ唄い　好郎
停止線信じてわたる幼稚園　花宵
赤信号ノンストップでもうけた気　鉄舟
ストップと怒鳴ってダンプ走り出し　孚彦
エンストへ四五台止まって肩を借し　雄峯
ストップと忍者のように出るポリス　静馬
飛び出した子へブレーキ間に合った　形水
答弁をストップさせる程の野次　いさむ
ハイウエイストップさして亀渡り　痴亭
ストップと違うよただのスランプ。　孚彦
赤信号ですよ肩がこり目まいがし　生々庵
グループの一人タクシー止める役　雄峯
白バイへもう観念のストップし　どんたく
急停車皆んな窓から顔を出し　雄峯
お手上げの工場に幹部誰も居ず　小松園
エンコすりゃ後は知らない免許証　一扇
遮断機へ貨車の長さに腹が立ち　梅里
居眠りがきょとんとしてる急停車　鉄舟
お手当もストップ猫もクビにする　多久志
書類みなストップさせて話し込み　清人
銀行のストップ下請までたたり　好郎
そぞろ歩き赤信号で向きを替え　白柳

## 兼題「野生」　菊沢小松園選

前衛派野生の枝を塗って生け　芳子
仔を産んで猫は野生の眼にかえり　正朗
檻を出たライオンついに射殺され　清泉
警察犬野生の鼻を駆り出され　章雅
ターザンになった夢見る都会の子　どんたく
動物園深夜野生の声で吠え　喜仙
飼犬も野生むき出し寄りつけず　一扇
解禁日野鳥に知らすすべもなく　吸江
野生から芸をしこんだ鞭の音　文秋
風雪にめげず野の草たくましく　美房
寒月へ野生にかえる夜の檻　公江
手土産に野生の花で喜こばれ　誓二
野生の味庖丁で活かす郷土食　一栄
ハイキング野生の花に狩り出され　公江
植木市野生の花も売れてゆく　静歩
潮風に吹かれ野生の松となり　生々庵
根性は野生のままの爪で秘め　痴亭
ボス猿は野生を捨てぬ面ら構え　形水
捨て犬が野生になった声で吠え　清人
ピクニック野生のバラにも好き嫌い　鉄舟
野生美は胸毛もあってしびれさせ　一三夫
ともすれば野生に戻る牙を持ち　双楽
逞しく生きて老木注連はられ　生々庵
飼いならしたつもりの亭主に噛みつかれ　清人
野生ではあんなに芸の出来ぬ虎　静歩
スターもう野生のポーズで売り出され　金三
ジャングルの生態茶の間で見るテレビ　好郎
デモ隊の乱れ野生の猿に似て　句楽
山の幸野生の味が歯にしみる　吸江
曼珠沙華人間なれば夜の蝶　一三夫
神経がこまかいくせに野生ぶり　柳宏子
飼われてた悲しき野生になりきれず　滋雀
とろろ芋野生のねばり箸を逃げ　梅里
踏まれても野菊は秋を忘れまじ　磯山
放牧へ野生美素晴らし三才馬　たつみ
野いちごに野生の味を教えられ　梅里
野生的魅力を買われ引きぬかれ　好郎
放し飼いされど野生の虎でなし　いき
無造作に生けて野菊の味を出し　芙己代
鬼薊野に咲く知恵の棘をもち　小松園
野に咲けばこそ野の花の美しき

★訂正―前号56P上段17行目、ホステスの眉に妬心をひく日ありは岡橋宣介氏作。

西来武治・みわ著
菩提心　B版　三一八P
定価　八八〇円
夫君が〝随筆集〟夫人が〝句集〟という異色作品である。みわ氏は〝川柳研究社〟の幹事で、三太郎先生の序に「西来みわ夫人とその長娘（五歳）が一枚これに加わっている」と書かれてあるように親子三人の努力作が一気に読ませる。
東京都千代田区神田三崎町一―二
発行所　保健同人社

# 名地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

## 交通局句会（大阪市）　児島与呂志報

思いではあれどつぎつぎ忘れて来　緑雨
余技展に能ある鷹の爪を見る　春巣
放心の一瞬まばたきまで止り　与呂志
放心へ諸行無常の鐘が鳴り　淡舟
落第と分る姿で帰って来　翠芳
放心の肩へ触ればわっと泣き　漫多郎
負けて泣き勝っても泣いた球児達　千尋
ささやかな勝負へかけてるコーヒ　鉄児
一人旅出たとこ勝負で朝を出る　六竜子
負けて勝つ妻反抗をしてくれず　凡々
勝負師のトップはやっぱり政治家か　タロベー
又説教顎突き出している不満　雅巣
顎紐にくらしを守る汗がしみ　孤舟
顎をのせハイ息止めてレントゲン　みのる
あごひげで紙幣を飾る伊藤公　徳松
のど自慢記念に残すあごの髭　多幸
ペンネームだけで一トケタ違う軸　正則
長男の趣味の切手へ並ばされ　継之助
趣味かいなママの小言がまだ続き　風来坊
しあわせは少女の頃の趣味を編み　笑風
事故現場趣味の写真が物を云い　欣也
趣味の石だんだん金に見えてくる　寿一
公休日朝から趣味の友が来る　力泉
趣味聞かれパチンコですとも云え　高秋
趣味ですする日曜大工高くつき　紀水
趣味のお茶忘我の境地お点前で　松風
趣味持てば生きる楽しみ湧いてくる　声風
台風が来たらと棟梁困らせる　三十四
良い身分クーラー病で風邪をひき　茶々坊
何時までもブームが続く切手趣味　清流
信号を待つ間もBGよく喋り　一乃字
男なら女にしてと云い寄られ　鉄舟

## 南大阪川柳会　金井文秋報

大空がこのうっぷんを受けとめる　古方
ふたりして歩く夜道は遠からず　梅里
草野球レフトの方は崖になり　水客
余燼消え妙に静かな暗さなり　柳宏子
帰れとは云えずいらぬ灯消しと来る　吸江
覚悟した二人へ叱らぬ親になり　小松園
プロ野球の選手と飲んだが自慢なり　静馬
口先の悔みをもっともらしく受け　滋雀
口先の同情だけが寄る左遷　痴亭
現代っ子口先だけはもう大人　花梢
野球拳もう宴会も山が見え　柳志
浮動票口先きだけで夢と消え　静歩
頭下げられてうっぷん込み上げる　八郎
口先は思てる事と逆に出る　喜仙
その覚悟念をおされてからくずれ　芙己代
気兼ねして二人にしたら黙っとり　あいき
ナイターに草のみどりがいきいと　文秋
今日からの苦労二人で分けあって　千梢
うっぷんが俺をこんなに小さくし　凡九郎
口先のおせじ子供の疑う目　弓彦
球場のサイレンを聞く駐車場　白柳
ほんとうの覚悟出来たか黙り込み　一舟
二人にはとても嬉しい聴診器　一栄
テレビだけの妻も一つぱし野球通　すゝむ
子供もう二人一緒に寝かされず　金三
覚悟したかと聞かれて又覚悟する　千万子
草野球秋空へ飛ぶホームラン　季賛
うっぷんは脳ばん出して胃につかえ　章雅
一荒れを覚悟の上できめつける　みよ
覚悟しなはれと女ついて来る　吉太郎

## 玉造川柳会（大阪市）　西出一栄報

無神論云うて居られず掌を合し　一舟
廻転の鈍い男が無欠勤　一栄
徒らにはやり空転した若さ　柳宏子
綿菓子の回転子供の夢を呼ぶ　眉水
回転の鈍い頭で親しまれ　文秋
美人らしい声へ廻転椅子がきしみ　あいき
ハッピ着た昔もあった回転椅子　静歩
交通禍古都の鹿まで気を配り　照一
交通道徳守って今日も無事帰り　金三
コーラスへ若さはマリに似ずむ　凡九郎
コーラスの娘判らず幕下りる　静馬
コーラスへ一人の声が聞こえすぎ　古方
言訳を多忙の二字で済ませる気　貞山
真剣に言訳をする顔の汗　喜久堂
言訳もコツがありチョッピリ嘘なぜ　水京
お土産を買うて言訳のたしにする　中性尼
言訳の嘘が気になる帰り道　好郎
秋風に蟻まだまだと良く動き　句念坊
秋風にサイフ妥協の音で鳴り　芙己代
秋風も松茸山へ来た匂い　恭太
建て付けの狂いが目立つ秋の風　章雅
しぼるだけしぼり秋風仄めかせ　滋
空ビクへ落日が早い秋の風　雀良

## 川柳世面多留（小野田市）国弘半休報

丸箸の子供がソーメンもてあまし　涼水
素麺も流せば違う味になり　呑海
そうめんが好き夏やせを気にしない　弘道
名司会おだて笑わせひきしめる　詩酔痴

清濁を併せ司会は丸く云い　素空
司会者の方が照れてる被露宴　清美
売れ残りばかりをあさる妻の趣味　花仙
売れ残りですわと気にも止めずうれ残り仲人だけはそう言わず　丘水
手に自信売れ残りの気が強いてんぷらに生れ変った売れ残り　久しげる
空港を発てば他愛もない日本　素道
空港へ手をふりに来る近所の子　半休
飛行機の車輪大地につき安堵　菊酔
空港に来て飛行機がこわくなり　新雪
胚かじる方が空港から帰り　霞花
この年で始末書を書く手が震え　純昌
横穴の水の美味さが泌むそうめん　羊歳
よく書けた軸床にあり読めず　六

**大鉄川柳会**（大阪市）　辻白溪子報

移転先大きく書いてPR　静二
移る気が多いと妻に意見され　和俊
栄転へ移る気もなく住み馴れる　初甫
都市計画移る費用でもめている　季賛
移り気をストップさせる人に会い　美穂
口がさけるようにオバQ欠伸する　飛鳥
ひざ小僧だいて不遇の日のくらし　ただし
母の眼が娘の膝上をたしなめる　杜的
共犯に泣き崩れたい膝がなし　求女
復活を喜ぶ友を一人持ち　宗悟
バイブルの嘘復活のこのあたり　立夏
復活を狙い露路まで顔を売り　永断
焼けぶとりして湯の街に客が混み　白溪子

**備前川柳会**　横山一声報

青空を見て落着こう試験前　正美
青空に老眼まぶしい遊覧機　幸仙
青空のようにありたい選挙戦　卓美
青空がやっとのぞいて傘をほし　水仙
日曜の青空朝寝がしておれず　一声
判決の白へ青空美しい　伊久野
青空をビルの谷から見つけだし　英子
澄切った青空猪など案じ　文平
許された二人に青い青い空　飴ン坊
青空の向うに僕の父がいる　正洲
青空の下できれいな嘘が言え　秋月
青空のない東京へ憧れる　胡風
青空の下人間の汚なすぎ　芳月
青空がこんなに青いものと知り　久米雄
一人旅洋酒の瓶が供をする　柳子
母の愚痴ふと今日聞いた寂しい日　三六

**ウイロー社句会**（ハワイ）　快夢起報

字の書ける嫁の代筆筆不精　雪女
筆不精謝して近況長く書き　三石
書ける手を持って書かぬと妻の愚痴　あき坊
筆不精竹馬の友と遠くなり　紅茶
筆不精たまの便りは死の通知　カロ女
年一度賀正ですます筆不精　泉水
サインだけカードに書いてすませとき　エス子
筆不精ようやく書いて出し忘れ　拝山
無心状まで代筆で書いてくる　魔花麗
来る日毎生活に追われ筆不精　内海
筆不精金送れだけ親に書き　逸名
筆不精紙一枚をもてあまし　万里歩
幸運も逃がしてしまう筆不精　紅渓
筆不精たまの手紙が付箋つき　麗花
筆不精いい口実に義理をかき　快夢起
拝啓それから暇どる筆不精　暁舟
電報のように短かい筆不精　浅太
筆不精往復ハガキは来たまんま　柳葉

**オーエスケー川柳会**（大阪市）　形水報

この怪我をどうしてくれる交通禍　一郎
大臣も急行止めて首になり　健坊
日曜日おもわぬ客に断われず　吉川
新婚に招ねかれたれど落ちつかず　天勝
店仕舞いお得意でない客ばかり　常務
来客で猫縁側へほり出され　専夢
よい客嫌いな客を子供知り　孝夫
来客を通し酒屋へ駆けてった　一扇
久しぶり客という名でもてなされ　白柳
新世帯もってつくづく親の味　広助
味のある生地でつせと値を通し　有一
土地の味楽しんでいる旅の宿　亜成
牛乳を飲むたび想う母の味　美露
店先に並ぶ味覚で秋を知る　順造
酒の味かみしめてむ年になり　真人
味付けもいつとはなしに母に似て　神田
インスタント料理情愛うすい味　木石
塩かげん化学調味で出ない味　形水
宣伝の味掌へのせてくれ　入仙

**七面短詩型文学クラブ**（和歌山）

領収書もらってつけで飲みなおし　芳子
家計簿をゆさぶりつづく領収書　公作
渡しても領収かかぬは妻ばかり　俊爾
領収書ちらちらさせて催促し　保
領収書先に渡されとまどいし　貞子
領収書その一枚が命とり　五幸月
明細のない領収書にしてもらい　三城
襟へ針さして飛び出す不意の客　石子
一本の針をさがして立たされる　淳子
つくろいのぐちも幸せ針を持ち　勉
再婚も必要でない針仕事　利晴
落ちかかる釦やさしい針が待ち　善八
錆びた針ばかりでどうと縫えと云う　美智子
針の手をとめて玄関にらみつけ　和三郎
ガラス戸にオバQがある秋の風呂　勲
ガラス戸一枚声のどかぬもどかしき　幸子
ひとすじの紫煙硝子はいて消え　登
ネックレスガラス玉とは知らなんだ　清
ウインドのガラスでそっと髪直し　和

**むらくも川柳会**（島根県）藤井明朗報

菊人形僅かに生きてる菊人形　広太
注文の唄に自信の三味の音　祥月
受験の子落ちつき見せた秋の夜　芳子
三味線へ若い世代がそっぽむき　白汀
三味の音の街も変ってジャズ喫茶　正朗
忠臣を返り咲かせて菊人形　一郎
三味線がきて宴席は艶を増し　正二
バラ色に酔わせてくれる菊人形　孝華
秋の夜罹災地冷える仮住居　清泉
声のよい方へ三味線引っぱられ　明朗
秋の夜の感傷もなく火を寄せる　加代
芸術院三味七十年を捨ておかず　清夢

**高知川柳社**（高知市）川竹松風報

食欲が出たと喜こぶ三分がゆ　たかし
愛情の献立夏バテ乗りきらせ　美知
うな丼で食欲が出た土用丑　勝子
旺盛な子の食欲へ目を細め　舞子
食欲へ秋の味覚が高すぎる　古城
食欲があれば と思う見舞籠　羅春
平凡な妻を裏切る旅の下駄　文子
平凡な母で笑顔を失わず　さだ子
平凡な父でよかった母の幸　秀岳
平凡な男意外な趣味をもち　桂緑
平凡な家で秘密のないくらし　呑洋
のこり火に似た情熱をかきたてる　一人
アベックの素肌に触れる秋の風　蟠蛇
血税と思うネオンの赤と青　紅雨
仮りでいい愛に溺れてみたい夜　大破
立ち話女ふさがる交通路　句念坊
演技とは思えぬように断わられ　伊津志
妻に云い負けてプイと街に出る　松風
旅三日こんなに読んだ週刊誌　夢迎
紹介を催促してる咳払い　和子
紹介はやめとく盗られそうだから　恵美子
藪医者と言ってたくせに戸を叩き　弓彦
じいちゃんが一番好きと知恵ぢき　百酒
何ごとも一番でなきや気が済まず　福郎
メロディー合ひと園児のマスゲーム　双楽
軍艦マーチあおぱチンコ屋に残り　好郎
本心にふれんとするがふれさせず　ゆきを
夢の果ての真珠はまろき薄わらい　素郎
一城のあるじが二階で下を貸し　梅里

**まるべに川柳会**（大阪市）川村好郎報

六百年を語る丸輪の靖の色　立児
末法の世も仏像は笑み給い　瓢太
外人の目に不思議な常夜灯　星斗
名も知らぬ白鳥降りて奈良も秋　泉睦
九折の道も楽しい古都の秋　一世
秋晴れへ春日の坐女も忙しく　好郎

**どんぐり川柳会**（大阪市）川村好郎報

いのちある限り煩悩捨てきれず　雪男
平和なら平和でいのち粗末にし　集一
還らざる命は雲が知っている　功雄
悪党の末路命乞いで終り　くり坊
スモッグの下限りなきいのちの流れ　一人
みな命かけた背の傷患者風呂　痴亭
注射してまだ逢わせたい人を待ち　雄峯
いのちかけた恋を他人のうるさい目　凡子
豆腐屋へ行くにも車道命がけ　喜風
いのちあるごと秋空の早くもり　章子
いのちの親名前も告げず濡ぬ去に　生長
追加分下戸が背負うて宴終る　弥生
花嫁の手にまだ触れぬ家宝あり　吸江
酒くせを知って追加が断られ　草春
花嫁の姿ですでに敷いて居り　梅里
ハイウエイあたら命をもてあそび　白柳
あるだけのポケット探すあわてう　薫風
花嫁の今日は蜘蛛にもたじろかず　
地獄の苦しみ舌抜かれてもあるらん　小松園
別れ道やっとポケットの手を離し　好郎

**どんぐり川柳会**（羽曳野市）川村好郎報

過去のひと思い出すほど恋がさめ　若舟
綿菓子が昔話をたぐりだし　鬼遊
過去なんて思うひまなし手内職　茶坊
姿見へそっと幸かみしめる　マサエ
恋の未練か後姿へふりかえり　史好
落ちぶれた姿してても自己曲げず　めぐみ
過去は伏せ奇遇の友に酒を酌む　幽玄
去る姿淋しかったとペンに秘め　みのぶ
溝へでも捨てたいくらいやな過去　芙蓉
子沢山八頭身も今やつれ　比呂路
もう過去のひととは思えど眠れぬ夜　狂太
好きなひと過去聞きたし聞きたくもなし　かをり
法事の日亡母の味するちらしずし　重夫
過去なんかどうでもよいすきな女　直己
過去は過去今のあなたが好きなの　寿美

怪談を残して今や繁華街　久郎
過去のひと再会誓ったはずなのに　於千
過去を知り怒る気もせぬ齢となり　敏夫
そう云えばうしろ姿がうすかった　八千代
故郷の人よ見てくれ晴れ姿　与太呂
ご馳走も割勘分は残されず　和子
ご馳走は子から先にと親心　義宏
待ちぼうけ側にも一人同じ顔　聖二
一人なら上手に云えた胸の内　輝成
晴れ姿内助の功は忘れまい　梅里
二十年の過去が尾を曳く混血児　好郎

**駒つなぎ川柳会**（大阪市）　南柳報

肩を叩くが挨拶の梯子酒　白柳
梯子酒ぶぶ漬屋までたどり着き　小路
梯子酒徳利の数は知っている　祥恵
やけ酒をいたわりながらもはしご　みよ
悪友にボーナス見られ梯子酒　南柳
川花火百万円は水が吸う　多津緒
腕の冴見せて板場のさじかげん　進之助
うっぷんへやたらとスプン音をたて　みよ
幼な児に一さじの味母の愛　昭い
薬局のサジは器用に二日分　小路
サングラスかけても恐くないあなた　恭太
サングラス似合う頭に刈れと言う　順三
あの人の気を引いてみるサングラス　柳信
内遊とシャレタ佐藤の票集め　龍雲
佐藤さん耳目は四つ口一つ　潔
聞くだけでやる気あるのか栄作氏　はやを
　　ひでお

**川柳たけはら**　山内静水報

貯金箱ブタと犬とをまちがえて　清子
さか上り出来て校庭だれもいず　洋子
兄ちやんの馬鹿バカなぜ死んだ　康宏
新聞をくばる僕等の歌がある　浩
こおろぎが鳴いて秋だなあと知り　勝彦
喧嘩相手の姉ちやんもらすぐお嫁入り　宏子
半分は子守りが食べた玉子ポール　浄美
愛称を呼ばれてハット立ち止り　悦子
小言いう母さんだけど甘えられ　延子
虫の音のコーラス秋の夜が好き　笑子

以上小・中・高校生

特ダネのように通知簿5が一つ　菊酔
海の幸とろろ昆布の舌ざわり　松風
権力の象徴庁舎建て直し　浮彦
安全帽とれば優しい父となり　鬼焼
赤い傘はずかしいから濡れて行く　晴文
月一度仲良しグループ母の会　輝子
わたくしも魔女になりたい夜のドラマ　こうじ
栗の実に思い出します故郷の秋　春江
慰霊祭遺族の顔もちとしなび　凡女
紅衛兵なるほど辞書に見あたらず　茶女
ハゼ釣りのお供はレース編むつもり　よし恵
おかあさんに何か贈ろう初任給　直
帯キユッと秋かみしめた音で締め　操子
サングラスこの子に大人ふと感じ　房枝
種熟れるまで朝顔の垣残し　澄恵
迷信だけれど胎児のためによす　そのみ
家計簿を開けばねむけもうさえい　房子
君ちよっと来いにネクタイ締め直し　清
淋しさをふっと覚える友が去り　文平
物足らぬ妻で噂の外におり　扇水
父ちやんが帰り隣りの児が帰る　無門
迷ってる友へ小いさなアドバイス　博司
石段を登れば視界俺のもの　花仙
なおも拒否するデスクに花がない　和尾
考える程に迷いが深くなり　花洞
枯葉舞う水面に冬が来てしやがみ　春昇
宿題は親にまかせた子の寝顔　不動
女湯の妻へ子の名で用をたし　静志
彼岸花赤い服着て誰を待つ　俊健


黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二一―四
夜間 (762) 四四〇八


鯛の目に何が人間めでたいか　不朽
怒らない約束をして聞きたがり　蘭幸
気をもましもまし台風それてくる　一路
汚職する国にすぎたる茜雲　政己
四十九日仏の顔が見たくなり　雅鳳
秋の夜を育児の本がくつろがせ　菁居
目を枉げぬ職人にある完成美　天石庵
仕事にも慣れ好きな人嫌な奴　静雨
芸術の秋へ画帳を揃えてみ　静火
生き甲斐はどうにか食べて世話が出来　静水

**明朗川柳会**（大阪市）　田中多幸報

泣き上戸祝いの席で泣き始め　多幸
長かりしゆめの入選祝いけり　金泉子
成人の祝だ背広着て出かけ　源川
敬老の祝の膳に鯉の味　芳
祝福をされても娘泣いており　茶々坊
還暦の祝もせずに長生きし　久子
祝日に国旗も出さず盃をあげ　浊水
祝日はほしいが主義で返上し　一登
式服が出来ぬのに又祝事　富士

祝酒飲めば目出度い唄が出る　清江
お婆すてを敬老に変え祝賀する　憙明
社長も出大臣も出る祝賀会　一休
喜寿米寿余生楽しむアクセント　弘生
祝盃をすぐ父ちゃんはあげたがり　軸

○

ロケットが希望に添えず落ちてくる　一休
共かせぎ希望の山は見えて来た　生仏
別居して初めの希望あてはずれ　弘生
冥途まで希望を持ったままで逝き　一登
たたみ替え希望のかなう日にそなえ　源
真剣な希望に歳のこと忘れ　花
もろもろの希望を乗せて移民船　芳
婚礼に希望通りの嫁と知り　久江
若い日の希望は成らず子につがせ　久子
希望通りならぬ浮世に尚未練　浊水
集団で就職希望得たなみだ　富士
行末を見られぬ孫に希望持ち　多幸
若人の希望天にも昇るなり　金泉子
土に生き希望も失せて土に帰す　憙明
一もうけたくらむ空のアドバルン　茶々坊
引越しに気ばかりあせるくもり空　古堂
片思い今日も合えるとそわそわし　清江
子を抱いてあごで行く先を教えてる　半田

**ふじかげ短詩会**（鳥取市）　礎山報

コワイ道足音だけがついて来る　コッコ
パトカーが交通事故の死者を出し　保夫
傷口が負けて泡ふくオキシフル　敬子
カナリヤへ黄味をやらうか誕生日　和宏
夕食を兄きん夫婦で造ってた　民子
明治からわが家をはげます古時計　保夫
スケッチのママのお顔がマンガぬき　ノリ子
握り飯子鳥さえずる山楽し　プッコ
あなどった鍬一匹が列をつけ　喬
オルガンが嬉し朝早よ目がさめた　恵子
洗濯機来てから宿題さぼられず　武志
逃げているらしいなめくじ流し這う　二朗
わからない名画ピカソの線と条　貴子
旅の文小鳥の世話も頼んで来　冨子
るさいナ思うがっぱりい母ちゃん　敏彦（カッチン）
味噌汁がおいしい今日もいい日だ　梅野
結極は犬猫小鳥母の世話　小学生

—以上中学、

予定より早く生れてあわてさせ　佳女
叱られた僕にも理屈はあるけれど　秀雄
知らぬとは言えず聞くのもはずかしい　和枝
洗濯は母の来るまでつんで置く　総
わが机せめても四季の花は活け　昭好
留守番を猫と小犬に預けとき　鎮也
三味の音が時にはさみしい温泉地　泰嗣
グジョウ節頼めば唄う祖父だった　征也
文化国カラーテレビが保証する　克秋
誰も居ぬのに内緒事声ひそめ　清久
好きと言う二つの言葉出しかねる　一代
居てほしい人へお菓子でつないどき　冨夫
姉の服セキセイインコと同じ色　英子
お茶たてて母と私の日曜日　多鶴子
なぜか知ら父母を危ぶむハイキング　広司
お洗濯沢山済ませ母機嫌　照夫
家族皆が六度楽しむ誕生日　征也
文化の日どんな気だろう災害地　長男
非行少年なぜかたがるサングラス　泰嗣
台風禍母へ戻った帽子だけ　政子
水あびる想い母さん床に臥す　鎮也
一握り土をかむせてもう逢えず　明

以上高校生

収穫へ病臥の日々が落ち着けず　勇仁
麻痺の指めげず希望の文字が跳ね　礎山

## 大阪文化祭川柳大会秀句

（席題）

定食のが刺が冴えぬ蛍光灯　福島　郁三
ライバルのかく横文字が板につき　後藤　梅志

（兼題）

兄嫁と代ってもらう赤電話　中尾　藻介
怒っても泣いても鏡へ来て坐り　岩垣　芳夫
ベトナムに落してならぬものひとつ　田中　令二
るす番は牛に頼んで秋祭　中野小源太
ハンドルを息子にわたしハイウェイ　山田　蛙水

宴会・折詰・出張パーティ
大禹
阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

## ・煙　水　輪　九・

いよいよ41年度はこれでおわる。一年はアッというまだが発送の日の葉子さんのつかれきった目を見ただけで、本になるまでの苦労がよくわかるのだ。

同人費や誌代切れの方には〝誌代切れ〟というハンコを封筒へ押しているが、本来なら一カ月前にハガキでお願いするのだが、なにしろ手不足である。ご諒承のほどを。なおご送金は振替口座大阪・三三三六八番をご利用ください。また振替用紙の要る方はお送りいたします。

（清水白柳）

## 新同人紹介

家沢齊花
―生々庵・無聖推薦

吾郷玲人
―白柳・生々庵推薦

## 本社十二月句会

日時　十二月五日（月）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

兼題
「空腹」　戸田古方
「末っ子」　本多柳志選
「隣り」　阿万万的選
「キャリア」　福島鉄児選
川村好郎選

席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　百五十円
・投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪 271 3985番

1月の兼題　「羊」「蝶ネクタイ」「正体」「大工」

本誌と同じサイズです
**川柳塔柳箋**
一冊（50枚）　65円
送料　35円

## ・募　集・

### 二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　若本多久志選

課題吟（各題5句以内）
「ストーブ」　宮口笛生選
「婚約」　松川杜的選
「豆」　河村日満選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

### 三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　西尾栞選

課題吟（各題5句以内）
「良心」　池田古心選
「メンバー」　福田丁路選
「空港」　黒川紫香選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

# 疲労回復へ 集中効果！

中外製薬

●活性持続型ビタミンB1とグロンサンの新配合です●複雑な神経の疲れの回復と●細胞に溜る疲労毒の解毒と●この二つが同時に疲れの深層へ働き●独特な集中効果で現代疲労の回復を早めます●新しい年の●新しい元気のもと「新グロンサン錠」を●中外会の店のしるしの出ている薬局・薬店でお求めください。

活性持続型ビタミンB1(＋)グロンサン

## 新グロンサン錠

〔包装〕 100錠・250錠・500錠


・2DK・

★一度座談会をしたかつたが、ついに果せなかつた。本年はこれでおわりである。

★フイナーレはにぎやかに、というわけでもないが、本号はたくさんの方にご登場願がつた。好評よみものの一大陸放浪一は残念ながら次号に回わつたことをおわびします。

★二校をとる時間がほしいのだがどうも現状ではムリのようで、だから本になつてから読むのがこわい。

☆師走のあわただしさは大好きだぼくはどうも泰平ムードつてヤツは性に合わないようである。だがジングルベルが、アルコールでジヤングルベルになるのはこまる。トラやオオカミはまつぴらだ。とくに一滴も飲めないぼくには、忘年会や新年宴会はニガ手である。さて、ことしは何回ぐらい仮病をつかうかな。いい年をお迎えください。（不二田一三夫）


定価 百二十円（送料六円）
半年分 七百五十円（〒共）
一年分 千四百四十円（〒共）
昭和四十一年十一月二十五日印刷
昭和四十一年十二月一日発行
編集兼発行人 中島逢太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
発行所 川柳塔社



GOLDEN
O.S.K
の紳士服
スマートで
着心地のよい

株式会社
オーエスケー

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年十二月二十五日　印刷
昭和四十一年十二月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　十二月号

国際級の贈答…

サントリーは
ことしも
32種の一流贈答セットを
ご用意いたしました

世界の銘柄
サントリー

料理も電話も　551　ここがいちばん
TEL（641）551-2

広東料理
豚饅　蓬莱　焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋店・心斎橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー

定価　百二十円（送料　六円）